

有価証券報告書

事業年度 自 2018 年 4 月 1 日
(第 53 期) 至 2019 年 3 月 31 日

NCS&A 株式会社

E 0 4 8 4 1

第53期（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

有 価 証 券 報 告 書

- 1 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し、提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

NCS&A 株式会社

目 次

頁

第53期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	5
4 【関係会社の状況】	6
5 【従業員の状況】	7
第2 【事業の状況】	8
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	8
2 【事業等のリスク】	10
3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	12
4 【経営上の重要な契約等】	17
5 【研究開発活動】	18
第3 【設備の状況】	20
1 【設備投資等の概要】	20
2 【主要な設備の状況】	20
3 【設備の新設、除却等の計画】	20
第4 【提出会社の状況】	21
1 【株式等の状況】	21
2 【自己株式の取得等の状況】	24
3 【配当政策】	25
4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	26
第5 【経理の状況】	38
1 【連結財務諸表等】	39
2 【財務諸表等】	70
第6 【提出会社の株式事務の概要】	83
第7 【提出会社の参考情報】	84
1 【提出会社の親会社等の情報】	84
2 【その他の参考情報】	84
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	85

監査報告書

内部統制報告書

確認書

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	近畿財務局長
【提出日】	2019年6月21日
【事業年度】	第53期(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
【会社名】	N C S & A株式会社
【英訳名】	NCS&A CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 辻 隆 博
【本店の所在の場所】	大阪市中央区城見1丁目3番7号
【電話番号】	(06)6946—1991(代表)
【事務連絡者氏名】	執行役員常務 経営戦略室長 小 林 裕 明
【最寄りの連絡場所】	大阪市中央区城見1丁目3番7号
【電話番号】	(06)6946—1991(代表)
【事務連絡者氏名】	執行役員常務 経営戦略室長 小 林 裕 明
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号) N C S & A株式会社東京本社 (東京都江東区豊洲5丁目6番36号) N C S & A株式会社名古屋支社 (名古屋市中村区名駅南2丁目14番19号)

第一部 【企業情報】

第 1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次 決算年月	第49期 2015年 3 月	第50期 2016年 3 月	第51期 2017年 3 月	第52期 2018年 3 月	第53期 2019年 3 月
売上高 (千円)	16,735,824	18,712,035	18,599,798	18,792,566	20,457,182
経常利益又は経常損失 (千円) (△)	△104,517	137,734	285,499	185,970	791,810
親会社株主に帰属する 当期純利益 又は親会社株主に帰属する 当期純損失 (△) (千円)	482,626	132,702	273,636	△1,112,496	573,295
包括利益 (千円)	626,886	△175,007	338,202	△1,075,013	153,588
純資産額 (千円)	10,755,817	10,351,222	9,884,821	8,568,371	8,583,686
総資産額 (千円)	17,590,015	17,228,422	16,305,884	14,884,269	16,550,878
1株当たり純資産額 (円)	502.87	485.43	529.98	465.58	465.80
1株当たり当期純利益又は 当期純損失 (△) (円)	26.74	6.20	13.96	△60.34	31.13
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	61.1	60.1	60.6	57.6	51.9
自己資本利益率 (%)	5.5	1.3	2.7	△12.1	6.7
株価収益率 (倍)	11.1	40.1	21.4	—	16.2
営業活動による キャッシュ・フロー (千円)	24,371	△36,582	871,630	248,349	1,148,814
投資活動による キャッシュ・フロー (千円)	△302,616	1,558,883	883,360	△335,148	72,622
財務活動による キャッシュ・フロー (千円)	△1,133,048	△645,863	△1,467,197	△449,331	△246,209
現金及び現金同等物の 期末残高 (千円)	6,042,201	6,912,611	7,197,629	6,664,843	7,632,849
従業員数 (名)	1,388	1,370	1,346	1,368	1,364

(注) 1. 「売上高」には、消費税等は含まれておりません。

2. 「潜在株式調整後 1株当たり当期純利益」については、第52期において 1株当たり当期純損失が計上されており、またすべての期間において潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 2014年 8 月 1 日に、当社は株式会社アクセスと経営統合し、新たに「NCS&A株式会社」として発足しました。第49期の当社グループの業績につきましては、旧日本コンピューター・システム株式会社の 4ヶ月分（2014年 4 月 1 日～2014年 7 月 31 日）の連結業績に、統合新会社である NCS&A株式会社の 8ヶ月分（2014年 8 月 1 日～2015年 3 月 31 日）の連結業績を合算した金額となっております。

4. 第52期の親会社株主に帰属する当期純損失は繰延税金資産の取崩しによる法人税等調整額の計上等によるものであります。

5. 第52期の株価収益率については、親会社株主に帰属する当期純損失を計上しているため記載しておりません。

6. 当連結会計年度において、株式会社テクノインフィニタスの全株式を取得したことにより、同社を連結の範囲に含めております。

7. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年 2 月 16 日）等を第53期の期首から適用しており、第52期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第49期	第50期	第51期	第52期	第53期
決算年月	2015年 3 月	2016年 3 月	2017年 3 月	2018年 3 月	2019年 3 月
売上高 (千円)	14,704,746	16,245,613	16,334,193	16,490,108	17,682,752
経常利益又は経常損失 (△) (千円)	△46,346	169,316	163,181	124,467	618,757
当期純利益又は当期純損失 (△) (千円)	387,542	92,058	175,436	△1,172,757	464,814
資本金 (千円)	3,775,100	3,775,100	3,775,100	3,775,100	3,775,100
発行済株式総数 (千株)	21,815	21,815	20,000	20,000	20,000
純資産額 (千円)	10,548,181	10,333,161	9,720,574	8,396,715	8,730,188
総資産額 (千円)	16,732,413	16,316,359	15,314,943	13,872,567	15,328,586
1株当たり純資産額 (円)	493.16	484.58	521.17	456.25	473.75
1株当たり配当額 (内1株当たり中間配当額) (円)	10 (—)	6 (—)	8 (—)	8 (—)	12 (—)
1株当たり当期純利益又は 当期純損失 (△) (円)	21.47	4.30	8.95	△63.61	25.24
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	63.0	63.3	63.5	60.5	57.0
自己資本利益率 (%)	4.5	0.9	1.7	△12.9	5.4
株価収益率 (倍)	13.9	57.9	33.3	—	19.9
配当性向 (%)	46.6	139.4	89.4	—	47.6
従業員数 (名)	1,075	1,070	1,048	1,048	1,045
株主総利回り (%)	96.9	83.3	101.3	129.9	172.0
(比較指標:配当込みTOPIX) (%)	(130.7)	(116.5)	(133.7)	(154.9)	(147.1)
最高株価 (円)	495	325	323	620	587
最低株価 (円)	260	209	229	270	342

(注) 1. 「売上高」には、消費税等は含まれておりません。

2. 「潜在株式調整後1株当たり当期純利益」については、第52期において1株当たり当期純損失が計上されており、またすべての期間において潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 第49期の1株当たり配当額10円には、合併記念配当4円を含んでおります。

4. 2014年8月1日に、当社は株式会社アクセスと経営統合し、新たに「NC S & A株式会社」として発足しました。第49期の当社の業績につきましては、旧日本コンピューター・システム株式会社の4ヶ月分（2014年4月1日～2014年7月31日）の業績に、統合新会社であるNC S & A株式会社の8ヶ月分（2014年8月1日～2015年3月31日）の業績を合算した金額となっております。

5. 第52期の当期純損失は、繰延税金資産の取崩しによる法人税等調整額の計上等によるものであります。

6. 第52期の株価収益率及び配当性向は当期純損失となったため記載しておりません。

7. 最高株価及び最低株価は、東京証券取引所市場第二部におけるものであります。

8. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）等を第53期の期首から適用しており、第52期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

2 【沿革】

年月	沿革
1961年10月	当社の前身会社日本システム・マシン株式会社に電子計算機部を設置。
1966年 9 月	日本システム・マシン株式会社より分離独立し、大阪市北区に日本コンピューター株式会社を設立、資本金500万円。
10月	日本コンピューター・システム株式会社に商号変更。
1972年 4 月	東京都杉並区に東京営業所(現 東京本社・江東区)を開設。
1974年 4 月	名古屋市中区に名古屋営業所(現 名古屋支社・中村区)を開設。
1983年 4 月	京都市下京区に京都営業所(京都支店)を開設。
4 月	コンピュータ保守専門子会社 オーエーエンジニアリング株式会社(現 連結子会社 エブリ株式会社)を設立。
1988年12月	1988年 8 月、システムインテグレーター認定制度に申請を行い、通産大臣の認定を受ける。
1989年12月	大阪証券取引所市場第二部に上場。
1993年 5 月	コンピュータシステム運用サービス子会社 エヌシーエステクノロジー株式会社(現 連結子会社 エブリ株式会社)を設立。
1999年 3 月	プライバシーマーク使用許諾事業者に認定される。
2000年 1 月	品質保証の国際規格「ISO 9001」の認証を取得。
2003年 4 月	環境に関する国際規格「ISO 14001」の認証を取得。(2017年 4 月より自主運用)
2004年 3 月	中国上海市に恩喜愛思(上海)計算機系統有限公司を設立。
3 月	「情報セキュリティマネジメントシステム(ISO 27001)適合性評価制度」の認証を取得。
5 月	大阪市中央区に本社を移転。
2007年 3 月	2004年 3 月及び2005年 3 月に取得した「情報セキュリティマネジメントシステム(ISO 27001)適合性評価制度」の認証を同制度の国際規格化に伴い、ISO/IEC 27001 /JIS Q 27001に移行。
2008年10月	京都支店を本社に統合。
2012年 3 月	IT支援サービス子会社 NCSサポート&サービス株式会社(現 連結子会社)を設立。
4 月	オーエーエンジニアリング株式会社とエヌシーエステクノロジー株式会社を合併、エブリ株式会社に商号を変更。
2013年 7 月	東京証券取引所と大阪証券取引所の現物市場統合により、東京証券取引所市場第二部に上場。
2014年 8 月	株式会社アクセスと合併、NCS & A株式会社に商号を変更。
10月	恩喜愛思(上海)計算機系統有限公司と株式会社アクセスの子会社であった阿克塞斯軟件(上海)有限公司を合併、恩愛軟件(上海)有限公司に商号を変更。

3 【事業の内容】

当社グループ（当社及び当社の関係会社）は、当社、連結子会社6社、持分法非適用関連会社1社で構成され、情報システムの構築を中心に、システムの設計・開発から運用支援・保守までの一貫した総合情報サービスの業務を行っております。

なお、持分法適用関連会社であったTranzax株式会社につきましては、当該会社の第三者割当増資にともない当社の持分比率が低下したため、持分法適用範囲から除外しております。

(1) システム開発

当社グループは、顧客からシステムの設計及びソフトウェアの開発を受託し開発を行うとともに、パッケージソフトウェアのカスタマイズを行い、ソリューションを中心とした販売を行っております。

開発作業の一部については、当社の連結子会社であるエブリ株式会社、NC Sサポート&サービス株式会社、恩愛軟件（上海）有限公司、株式会社フューチャー・コミュニケーションズに外注しております。

(2) サービス

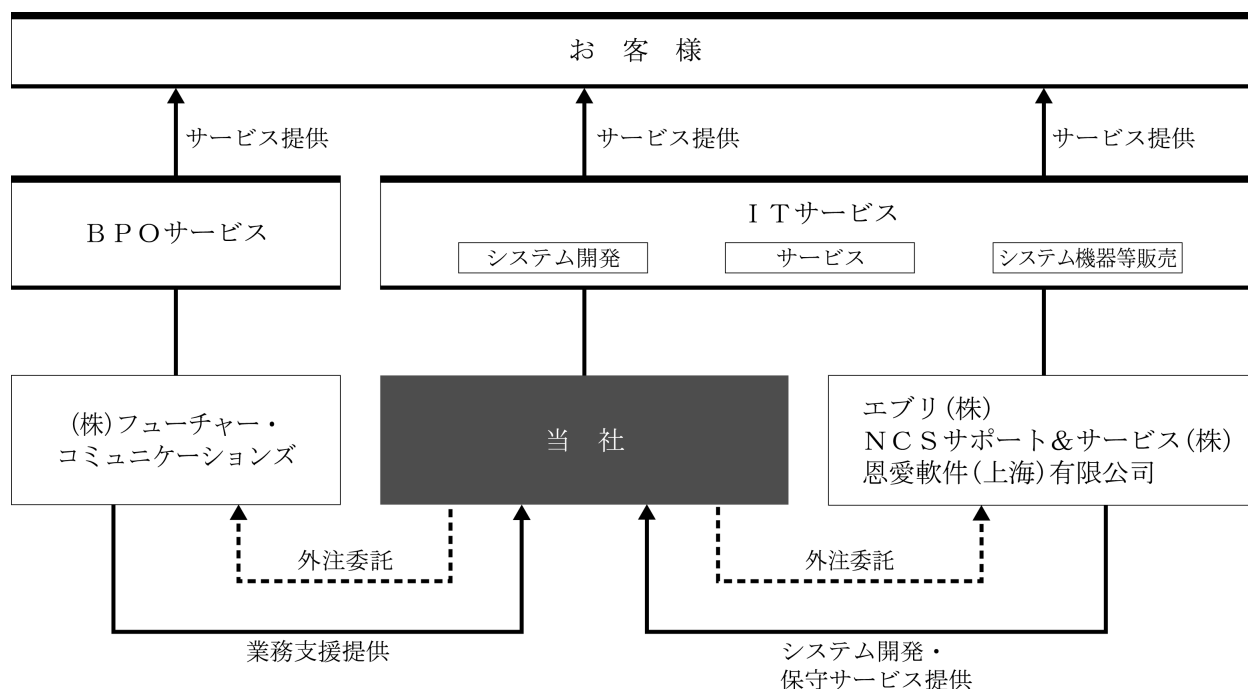
当社グループは、コンピュータ機器の保守を行うハードウェア保守サービス及び企業のコンピュータシステムに対する全般的な支援サービスを行うシステムサポートサービスを中心にサービス業務を行っております。また、金融系・IT系を中心に流通、通販のインバウンド・アウトバウンドのコールセンター業務を当社の連結子会社である株式会社フューチャー・コミュニケーションズにて運営しております。

サービス業務の中のハードウェア保守サービス及びシステムサポートサービスについては、その業務の一部を当社の連結子会社であるエブリ株式会社に外注しております。

(3) システム機器等販売

当社グループは、コンピュータ機器及び周辺機器、自社開発パッケージソフトウェア、他社開発パッケージソフトウェアの販売を行っております。

主な品分類の内容と系統図は次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (千円)	主要な品分類の内容	議決権の 所有(被所有)割合		関係内容
				所有割合 (%)	被所有割合 (%)	
(連結子会社)						
エブリ株式会社	大阪市城東区	80,000	サービス事業 (保守サービス) (運用支援サービス)	100.0	—	当社販売のコンピュータ機器の 保守サービス及び運用支援サー ビスを行っております。 役員の兼任 なし
恩愛軟件（上海） 有限公司 (注) 1	中華人民共和国 上海市	430,000	ソフトウェア開発	100.0	—	当社販売のソフトウェアの開 発、関連の技術コンサルティング 及びアフターサービスを行っ ております。 役員の兼任 なし
NCSサポート& サービス株式会社	大阪市中央区	10,000	I T支援サービス	100.0	—	当社販売のソフトウェアの開 発、支援サービスを行っており ます。 役員の兼任 なし
株式会社ファインバス (注) 4	大阪市中央区	10,000	ソフトウェアの企画・ 販売	100.0	—	— 役員の兼任 なし
株式会社フューチャー・ コミュニケーションズ	大阪市中央区	36,850	コールセンター 人材サービス アウトソーシング	100.0	—	当社へ人材サービス等の支援サ ービスを行っております。 役員の兼任 なし
株式会社テクノインフィ ニタス (注) 5	東京都港区	75,000	システム開発サービス 運用管理・運用支援・ 保守サービス	100.0	—	当社へのソフトウェア開発の委 託及びコンピュータ機器の販売 を行っております。 役員の兼任 なし

(注) 1. 特定子会社であります。

2. 有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している会社はありません。

3. 連結売上高に占める売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の割合が10%を超える連結子会社はありません。

4. 株式会社ファインバスは、2018年3月末をもって営業を停止し、現在は休眠会社となっております。

5. 2018年10月1日付で株式会社テクノインフィニタスの全株式を取得し、同社を連結子会社といたしました。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2019年3月31日現在

職種別の名称	従業員数(名)
営業職	103
技術職	1,087
総括職・事務職	174
合計	1,364

(注) 1. 従業員数は、当社グループから当社グループ外への出向者を除き、当社グループ外から当社グループへの出向者を含む就業人員数であります。

2. 当社グループは、単一セグメントであるため、職種別の従業員数を記載しております。

(2) 提出会社の状況

2019年3月31日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
1,045	41.1	16.8	5,685,772

職種別の名称	従業員数(名)
営業職	81
技術職	868
総括職・事務職	96
合計	1,045

(注) 1. 従業員数は、当社から他社への出向者を除き、他社から当社への出向者を含む就業人員数であります。

2. 当社グループは、単一セグメントであるため、職種別の従業員数を記載しております。

3. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

(3) 労働組合の状況

当社の労働組合(NCS&A労働組合)は、1969年4月に結成され、労使関係は相互信頼を基調としております。このため労使協議会を定期的に実施し職場の諸問題改善等について労使間の意思疎通を図っております。なお、上部団体として電算機関連労働組合協議会に加盟しております。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営の基本方針

当社グループは、創業の精神である「コンピューターは社会に奉仕する」のもと、情報技術の急速な発展による社会構造の大変革期において、安心で快適な夢あふれる未来の実現に貢献することを企業理念として、お客様に信頼される企業として成長していくことを経営の基本方針としております。

近年、企業経営を取り巻く環境に関して社会的な関心を集める幾多の出来事があり、コンプライアンスや資本政策など、社会における企業の存在価値が改めて問われている時代であるとの認識を深めております。このような企業価値を問われる時代にこそ、改めて企業経営の原点に立ち戻り、お客様やお取引先様から評価され、株主様の期待に応え得る信頼される企業として成長しなければならないとの思いを強めています。この方針の下で、先進的なビジネスモデルを支えるIT利活用の企画からシステム構築、その運用に至る一貫したサービスを通して、お客様の経営課題を解決し、経営戦略を実現することこそが、当社グループの存在意義であると捉えております。これから「お客様とともに成長するNC S & A」を目指して、継続的な努力をまいります。

(2) 目標とする経営指標

収益性と資本効率を重視し、売上高営業利益率とROE（自己資本利益率）を経営指標として用いています。株主資本の有効活用、経営の効率化を図りながら収益性を高めることが、企業価値の向上に繋がり、株主の皆様、従業員を含め全てのステークホルダーの利益に叶うものと考えています。

(3) 中長期的な会社の経営戦略

当社グループは、企業メッセージ「Grow on with Clients, now and forever」のもと、新たな技術に果敢に挑戦しながら、しなやかな発想で、価値あるITサービスをお客様に提供し、お客様とともに成長し続ける企業を目指し、以下の施策を展開してまいります。

① 事業の拡大

- ・可視化ビジネスをはじめとする当社の主力ソリューションへの投資、経営資源の重点配分により他社との差別化を図ることで、プライムビジネス及びストックビジネスの事業規模の拡大を図ります。
- ・大手SIerからの受託開発事業につきましては、従来の派遣を中心とするビジネスモデルから脱却し、専門テクノロジーに特化した請負開発へのシフトを進め、顧客の事業における当社のポジションを明確にし、協業関係を維持・拡大してまいります。

② 新しい領域でのビジネス展開

- ・新領域として取り組んでいるAI（人工知能）を活用した業務イノベーション支援サービスにつきましては、顧客の課題解決に向けたソリューションモデルの検証をさらに進めるとともに、既存事業との融合を進めてまいります。
- ・コンサルティングファーム・メーカー・大手SIer・販売代理店とのアライアンスを進め、ビジネスエリアの拡張・規模拡大を図ってまいります。

③ PMOによるプロジェクト統制の強化

- ・PMO活動を継続・強化し、KPI（重要業績評価指標）設定による改善項目と目標可視化の管理で、プロジェクト遂行におけるリスクを未然に防ぎ、収益性の向上を図ります。
- ・プロジェクトマネジメント力の強化に向けて、人材教育・研修制度の整備・拡充に努めます。

④ コンプライアンス意識の浸透

企業が経営活動を行う上で、法令や各種規則への対応、さらには社会的規範の遵守など、多くの面で高い企業倫理が求められています。当社ではこのような社会の要求に応えるため、

- ・コンプライアンス責任者を明確にした体制を確立し、社内啓蒙はもとより当社グループ、開発パートナーに至るまで、法令の遵守、コンプライアンス意識の浸透と拡大に努めています。
- ・内部統制システムの整備・運用をさらに充実してまいります。

⑤ 人材の育成と確保

情報サービス産業において人材は最も重要な経営資源であり、その育成は最重要課題であります。

- ・多様化する顧客ニーズに応えるため、経営戦略に沿った人材育成制度とそれを支える人事諸制度の継続的な整備に取り組みます。
- ・社員が安心して長く勤められる企業風土づくりに向け、勤務形態の多様化への対応や付加価値創造型の人材育成への取り組みなどの働き方改革を推進してまいります。

⑥ 品質及び生産性向上への取り組み

- ・開発標準に準拠して、特に要件定義や基本設計など上流工程での品質の作り込みを徹底し、スケジュール遅延や後工程の時間的圧迫を未然に防ぐなどプロジェクト全体の生産性向上に努めます。
- ・業種・業務・システム特性毎に製品の標準化を図ることにより、品質と生産効率の向上を図ります。

(4) 会社の対処すべき課題

今後のわが国の経済は、このところ輸出や生産の一部に弱さも見られますが、雇用・所得環境の改善が続くなかで、緩やかな回復が続くものと予想されます。しかしながら、通商問題の動向が世界経済に与える影響や、中国経済の先行き、金融資本市場の変動の影響など、海外情勢をめぐる不確実性は強く、これらの動向によっては、わが国の経済に悪影響を及ぼす恐れがあります。

情報サービス産業におきましては、企業収益の改善にともない、引き続きIT投資需要は堅調に推移していくものと予想されております。

このような環境のもと、当社グループは、引き続き「主力ソリューションの商品力強化」及び「営業力の強化」を両輪とした「トップライン（売上）の拡大」を基本方針とし、持続的な成長に向けて、以下の施策を実施してまいります。

- ・他社との差別化を図るため、主力ソリューションの品ぞろえを増やすとともに、商品力強化のための投資を積極的に行います。
- ・PMO（プロジェクトマネジメントオフィス）の活動をより一層有効なものとするため、解決すべき課題を開発現場との間で共有し、開発現場に寄り添い、共に問題解決にあたることで、品質向上とプロジェクト損失の抑制を図ります。
- ・会議体の構成をよりシンプルなものへと見直し、経営の意思決定とその執行スピードのさらなる向上を図ります。
- ・全ての社員がより長く生き活きと働ける会社となるために、人事制度改革と働き方改革を進め、社員が働きやすくなるような環境改善に取り組みます。
- ・人材の不足及び高齢化への対応として、必要とされるスキルを身につけるためのプログラム再教育（NCS&A版リカレント教育）を実施いたします。
- ・NCS&Aグループ各社の事業シナジーの追求、コスト構造改革を進め、グループ経営の総合力を高めます。

2 【事業等のリスク】

当社グループの事業状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には以下のものがあります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経済情勢変化と技術革新

当社グループが属する情報サービス産業においては国内景況感の改善にともない、企業のIT投資は引き続き堅調に推移しているものの、競合他社との激しい価格競争や外注単価の上昇等により引き続き厳しい状況が続いております。このような環境のもと、経済情勢の変化等により顧客企業のIT関連投資抑制や業界内部の価格競争がさらに急速に進行・持続した場合には、当社グループの経営成績や財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

当社ではこうした事態に対し、アウトソーシングサービス、クラウドサービスなどIT投資抑制の影響を受けにくいストックビジネスを強化するとともに、営業・開発が連携し顧客志向の事業活動を推進することで顧客ニーズをより早く、より正確に捉え、顧客拡大及び顧客内シェア拡大を推進しております。

また、社員のITスキルに対応したキャリアアップ、教育研修制度の充実、及び先進的開発技術取得への活動を展開しております。

(2) 不採算プロジェクトの発生

当社グループの事業、とりわけシステム開発においては、お客様からの仕様追加や開発方式の変更等により当初見積り以上に作業工数が増大した場合、受託責任としてその開発リスクの負担を求められる場合があり、結果として不採算となるプロジェクトが発生することがあります。また、納入後の不具合の発生等により修復に要する費用が業績に影響を及ぼす可能性があります。

当社では、PMOを設置し、全社的な視点から各プロジェクトの規模、進捗、重要度及び緊急度を判断し、効果的な人材配分やプロジェクト支援、監査を実施することで、不採算プロジェクトの発生防止に努めております。

(3) 特定取引先への依存

当社は日本電気株式会社（以下、NEC）の販売特約店でありNECが製造販売するコンピュータ機器と当社グループの保有する情報技術やソフトウェアパッケージを組み合わせた情報システムを販売するとともに、NECグループが受注した大型プロジェクトのSIサービス業務を受託し、開発作業を分担しております。これらの売上は当社グループの大きな事業収入の柱となっており、今後NECにおいて経営方針または取引関係における事業方針の大幅な変更がなされた場合、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

当社グループでは、こうしたリスクを回避するためにNECグループのITサービス事業における当社のポジションを明確にし、その強みを発揮して協業関係を維持・拡大するとともに、中堅・中小規模の企業・法人への販路拡大にも努めております。

(4) 情報セキュリティ問題

システムの開発、運用に関連する情報セキュリティの確立・維持は当社グループにとって重要な経営課題と認識しており、万が一、悪意のあるセキュリティ侵害を受けた場合や、業務遂行上取り扱う機密情報や個人情報の漏洩が発生した場合は、情報サービス企業としての社会的信用の失墜や損害賠償責任など、当社グループの業績に多大な影響を及ぼすものと思われます。

当社では、情報セキュリティマネジメントシステムを構築し、社内へのセキュリティ意識の啓蒙を行うとともに、こうしたセキュリティインシデントの発生防止と発生時のリスクの最小化、及び再発防止にむけての実行体制を強化しております。また、その結果として、第三者機関よりISO/IEC27001（情報セキュリティ）の認証を取得し、プライバシーマーク使用許諾事業者としても認められております。

(5) 人材の確保

当社グループが属する情報サービス産業においてはコンピュータのハードウェア技術、ソフトウェアの開発言語、アプリケーション及びネットワーク技術等の幅広い知識が求められており、またAI、IoT、ビッグデータ、RPA等に代表される技術革新が急速に進んでおります。これに対応できる開発技術者、優秀なプロジェクトマネージャ、及びシステム構築要員の確保が不十分であれば、競争力が低下し、受注の縮小、プロジェクト採算性の悪化等をもたらす可能性があります。

当社グループでは優秀な人材採用・雇用に努めるとともに、開発人材の教育・研修の強化を行っております。

(6) 自然災害等

地震等の自然災害、テロ行為、感染症の流行等により、当社グループの主要な事業所等が壊滅的な被害を被った場合や多数の従業員が被害を受けた場合には、その復旧や代替のために多大な費用が発生するとともに、販売活動などの事業活動に大きな影響を与えるため、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

当社グループでは、こうしたリスクの発生に備えて事業継続活動に取り組んでおります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社及び連結子会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

① 財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、海外経済の動向と政策に関する不確実性や金融資本市場の変動の影響が懸念されるなか、企業収益は改善し、雇用・所得環境にも改善が見られるなど、緩やかな回復が続きました。

当社グループが属する情報サービス産業におきましては、企業収益の改善にともない、顧客企業におけるIT投資需要は引き続き堅調に推移いたしました。AI、IoT、ビッグデータ、ブロックチェーン等の技術を利用する新しい製品、サービス、ビジネスモデルで競争上の優位性を確立する「DX（デジタルトランスフォーメーション）」への取り組みや、RPA（ロボティックプロセスオートメーション）、テレワークといった「働き方改革」の実現に向けたIT活用など、ITの積極活用による経営戦略実現を目指す企業のIT投資動向は強まりを見せており、今後もIT投資需要は拡大していくものと予想されております。

このような環境のもと、当社グループは、主力ソリューションによる「トップライン（売上）の拡大」を積極的に推進し、一方で、プロジェクト損失を最小限に抑えるべく、PMO（プロジェクトマネジメントオフィス）の体制強化及び不採算プロジェクトの発生防止に努めました。また、ソフトウェア開発における部品化・再利用をはじめとする開発作業の効率化や、人事評価制度の運用における管理工数の削減といった社内業務プロセスの簡素化によるコスト削減など、収益構造の改善に取り組みました。

ホテルシステム事業につきましては、インバウンド旅行者の増加を背景とした新設ホテルの開業が続くなか、積極的な受注活動を推進し、売上、利益ともに引き続き堅調に推移いたしました。自社開発製品である金融業向け個人信用情報接続ソリューション「Ccms（シーシーエムエス）」、システムの可視化ソリューション「REVERSE PLANET（リバースプラネット）」につきましては、既存顧客の深耕や同業他社とのアライアンス強化による導入ユーザー数の拡大に努めました。また、製造業向け生産管理システム「Factory-ONE 電脳工場」をはじめとした他社製パッケージの導入・カスタマイズ案件につきましては、旺盛な需要に支えられ受注が堅調に推移いたしました。

大手SIerからの受託開発事業につきましては、かねてより官公庁をはじめとした得意分野への集中による採算性の向上を推進しておりますが、当期におきましては、金融分野の大型案件への参画にともない売上、利益ともに堅調に推移いたしました。

AI事業につきましては、「IBM Watson Explorer」を利用した業務イノベーション支援サービスの受注活動に注力し、試行導入（PoC、概念実証）から本格導入へと進むユーザーの獲得が進み、売上が伸長いたしました。地理空間情報ソフトウェア製品群「Luciad」の販売につきましては、官公庁向けの案件を獲得し、売上増、利益増に寄与いたしました。

加えて、当社子会社の株式会社フューチャー・コミュニケーションズにて運営しているコールセンター事業につきましては、電力・ガス小売り自由化にともない増加している料金関係業務を集中的に実施するため、電力会社から委託を受け開設した新事務所の運営がスタートするなど、売上面、利益面ともに大きく貢献いたしました。

この結果、当連結会計年度の売上高は、前期に比べ16億64百万円（8.9%）増収の204億57百万円となりました。利益面につきましては、前期に計上したシステム開発事業における一過性損失によるマイナス影響が解消されたことに加え、増収による売上総利益の増加及び一般管理費抑制による利益率改善により、営業利益は前期に比べ6億6百万円改善の6億88百万円、経常利益は前期に比べ6億5百万円改善の7億91百万円、親会社株主に帰属する当期純利益は前期に比べ16億85百万円改善の5億73百万円となりました。

当連結会計年度の品分類別の概況は次のとおりであります。

＜システム開発＞

パッケージカスタマイズ売上は前年より減少したものの、業務アプリケーション開発においてホテル・金融業・流通業向け開発売上が前期に比べ増加しました。

その結果、システム開発売上高は、87億26百万円（前期はシステム開発売上高80億48百万円）となりました。

＜サービス＞

運用支援サービスは前年に比べ減少したものの、パッケージ導入サービスや顧客アプリケーション保守サービスの売上が前期に比べ増加しました。

その結果、サービス売上高は、89億50百万円（前期はサービス売上高83億90百万円）となりました。

＜システム機器等販売＞

サーバの販売は前期に比べ減少したものの、パソコン等の販売やパッケージの販売が前年に比べ増加しました。

その結果、システム機器等販売売上高は、27億80百万円（前期はシステム機器等販売売上高23億54百万円）となりました。

（資産）

当連結会計年度末における総資産は165億50百万円となり、前連結会計年度末に比べ16億66百万円増加いたしました。流動資産は139億99百万円となり、15億69百万円増加いたしました。主な要因は、現金及び預金の増加（9億80百万円）、受取手形及び売掛金の増加（4億59百万円）、商品の増加（3億21百万円）等であります。固定資産は25億51百万円となり、96百万円増加いたしました。主な要因は、その他に含まれる長期前払費用の増加（1億39百万円）、投資有価証券の減少（47百万円）等であります。

（負債）

当連結会計年度末における負債合計は79億67百万円となり、前連結会計年度末に比べ16億51百万円増加いたしました。流動負債は41億89百万円となり、12億16百万円増加いたしました。主な要因は、賞与引当金の増加（5億5百万円）、未払法人税等の増加（2億44百万円）、その他に含まれる前受金の増加（2億28百万円）、支払手形及び買掛金の増加（1億43百万円）等であります。固定負債は37億77百万円となり、4億34百万円増加いたしました。主な要因は、退職給付に係る負債の増加（4億92百万円）等であります。

（純資産）

当連結会計年度末における純資産合計は85億83百万円となり、前連結会計年度末に比べ15百万円増加いたしました。主な要因は、利益剰余金の増加（14億89百万円）、資本剰余金の減少（10億61百万円）、退職給付に係る調整累計額の減少（4億18百万円）等であります。

なお、自己資本比率は、前連結会計年度末の57.6%から51.9%となりました。

② キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という）は、前連結会計年度末に比べ9億68百万円増加し、76億32百万円となりました。

なお、当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果得られた資金は11億48百万円（前連結会計年度は2億48百万円の収入）となりました。主な要因は、税金等調整前当期純利益の計上（7億91百万円）、賞与引当金の増加（5億5百万円）、減価償却費の計上（2億66百万円）等による収入に対して、たな卸資産の増加（3億81百万円）等の支出によるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果得られた資金は72百万円（前連結会計年度は3億35百万円の支出）となりました。主な要因は、有価証券及び投資有価証券の売却（2億43百万円）、連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得（47百万円）等による収入に対して、無形固定資産の取得（1億34百万円）、有形固定資産の取得（86百万円）等の支出によるものであります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果使用した資金は2億46百万円（前連結会計年度は4億49百万円の支出）となりました。主な要因は、配当金の支払（1億47百万円）、リース債務の返済（82百万円）等の支出によるものであります。

③ 生産、受注及び販売の実績

a. 生産実績

当連結会計年度における生産実績を品分類別に示すと、次のとおりであります。

品分類		生産高(千円)	前期比(%)
システム開発		8,754,730	10.1
サービス	サービス	8,215,095	8.1
	ハード保守	767,337	0.1
	小計	8,982,432	7.4
合計		17,737,162	8.7

(注) 1. 金額は、販売価格によっております。

2. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

b. 受注実績

当連結会計年度における受注実績を品分類別に示すと、次のとおりであります。

品分類		受注高 (千円)	前期比 (%)	受注残高 (千円)	前期比 (%)
システム開発		8,357,210	△5.5	1,937,509	△16.0
サービス	サービス	8,665,530	13.8	1,297,195	59.2
	ハード保守	766,222	△0.1	5,088	△18.0
	小計	9,431,753	12.5	1,302,284	58.6
システム機器等販売		3,374,996	53.5	1,043,438	132.4
合計		21,163,960	8.9	4,283,232	19.8

(注) 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

c. 販売実績

当連結会計年度における販売実績を品分類別に示すと、次のとおりであります。

品分類		販売高(千円)	前期比(%)
システム開発		8,726,142	8.4
サービス	サービス	8,183,115	7.3
	ハード保守	767,337	0.1
	小計	8,950,452	6.7
システム機器等販売		2,780,587	18.1
合計		20,457,182	8.9

(注) 1. 主な相手先別の販売実績及び総販売実績に対する割合

相手先	前連結会計年度		当連結会計年度	
	販売高(千円)	割合(%)	販売高(千円)	割合(%)
日本電気株式会社	3,551,891	18.9	4,327,893	21.2

2. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

① 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成にあたりましては、経営者の判断に基づく会計方針の選択・適用、資産・負債及び収益・費用の計上及び開示に影響を与える見積りが必要となります。これらの見積り及び判断につきましては、過去の実績及び状況等から合理的に判断しておりますが、見積り特有の不確実性があるため、実際の結果は見積りと異なる可能性があります。

当社グループの連結財務諸表で採用する重要な会計方針は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 注記事項（連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項）」に記載しております。

② 当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

（売上高及び営業利益）

当連結会計年度における当社グループの売上高は、前期比16億64百万円増収の204億57百万円、営業利益は前期比6億6百万円増益の6億88百万円となり、「増収増益」となりました。

この営業利益につきまして、前期からの変動要因を分析いたしますと、増収による利益増が3億76百万円、売上総利益率改善による利益増が1億38百万円、販売費及び一般管理費の減少による利益増が91百万円であります。

当社グループは、主力ソリューションによる「トップライン（売上）の拡大」を掲げ、営業力の強化を図り、受注獲得を積極的に推進いたしました。その結果、前期比8.9%の増収を達成することができました。売上総利益率につきましては、プロジェクト損失を最小限に抑えるべく取り組んでまいりましたPMO（プロジェクトマネジメントオフィス）の体制強化等が効果を発揮し、新たな大型の不採算プロジェクトの発生を抑えることができました。その結果、売上総利益率は前期に比べ0.7ポイント改善いたしました。また、販管費及び一般管理費につきましては、間接部門から直接部門への要員シフトを実施した結果、人件費の減少につながりました。

（売上高営業利益率）

当社グループは目標とする経営指標として「売上高営業利益率」を用いており、中長期的な目標として「5%」を設定しております。当連結会計年度における当社グループの売上高営業利益率は前期に比べ3.0ポイント改善し3.4%となりました。今後につきましては、目標到達に向けて、プロジェクト損失のさらなる抑制、売上の増大、及び収益性の改善に向けた施策を実施してまいります。

（営業外損益及び経常利益）

営業外収益は前期比2百万円増加の1億10百万円となりました。また、営業外費用は前期比3百万円増加の6百万円となりました。

その結果、経常利益は前期比6億5百万円改善の7億91百万円となりました。

（特別損益及び親会社株主に帰属する当期純損益）

特別利益につきましては、前連結会計年度の34百万円に対し、当連結会計年度の発生はありませんでした。また、特別損失につきましても、前連結会計年度2億27百万円に対し、当連結会計年度の発生はありませんでした。その結果、税金等調整前当期純利益は前期比7億99百万円改善の7億91百万円となりました。

また、法人税等は、前連結会計年度に発生した繰延税金資産取崩しの反動により、前期比8億86百万円減少の2億18百万円となりました。

その結果、親会社株主に帰属する当期純利益は前期比16億85百万円改善し、5億73百万円となりました。

(自己資本比率)

当連結会計年度末の自己資本比率につきましては51.9%となり、前連結会計年度末の57.6%から5.7ポイント低下いたしました。このたびの自己資本比率の低下につきましては、一時的な要因によるものであり、当社としては大きな問題はないと認識しております。

なお、自己資本比率変動の詳細につきましては、「第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (1) 経営成績等の状況の概要 ①財政状態及び経営成績の状況」をご参照ください。

(資金の財源及び資金の流動性)

当社グループの主要な資金需要は、ソフトウェア開発及びサービス提供のための労務費、外注費、経費、販売用ハードウェア等の仕入、販売費及び一般管理費等の営業費用、並びに市場販売目的ソフトウェアの改良・強化にかかる投資等であります。これらの資金需要につきましては、営業活動によるキャッシュ・フロー及び自己資金で賄うことを基本方針としております。今後またな卸資産の削減、受注の増大及び売掛金の早期回収等により営業活動によるキャッシュ・フローの拡大を図ってまいります。

当連結会計年度におきましては、営業活動によるキャッシュ・フローが大きく拡大したことにより、当連結会計年度末における当社グループの現金及び現金同等物の残高は76億32百万円と、前期末比9億68百万円増加いたしました。

なお、キャッシュ・フローの状況の詳細につきましては、「第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (1) 経営成績等の状況の概要 ②キャッシュ・フローの状況」をご参照ください。

キャッシュ・フロー指標のトレンドは次のとおりであります。

	第49期 2015年3月期	第50期 2016年3月期	第51期 2017年3月期	第52期 2018年3月期	第53期 2019年3月期
自己資本比率 (%)	61.1	60.1	60.6	57.6	51.9
時価ベースの自己資本比率 (%)	36.2	30.8	34.1	47.1	56.0
キャッシュ・フロー対有利子負債比率 (倍)	53.9	—	0.4	1.1	0.2
インタレスト・カバレッジ・レシオ (倍)	0.9	—	100.7	113.0	807.0

(注) 自己資本比率：自己資本／総資産

時価ベースの自己資本比率：株式時価総額／総資産

キャッシュ・フロー対有利子負債比率：有利子負債／営業キャッシュ・フロー

インタレスト・カバレッジ・レシオ：営業キャッシュ・フロー／利払い

1. 各指標は、いずれも連結ベースの財務数値により計算しております。
2. 株式時価総額は、期末時価終値×期末発行済株式総数(自己株式控除後)により計算しております。
3. 営業キャッシュ・フローは連結キャッシュ・フロー計算書の営業活動によるキャッシュ・フローを使用しております。有利子負債は、連結貸借対照表に計上されている負債のうち利子を支払っている全ての負債を対象としております。また、利払いについては、連結キャッシュ・フロー計算書の利息の支払額を使用しております。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

当社グループの当連結会計年度における研究開発活動は、攻めのIT（企業価値向上）分野として、アナリティクス領域であるテキストマイニングとコグニティブ領域であるAI（人工知能）の研究を昨年度に続き、取り組みました。また、様々な分野で今後の活躍が期待されるブロックチェーンに関する研究、RPAツールの付加価値の研究についても取り組みを始めました。その概要は次のとおりであります。

なお、当連結会計年度の研究開発費は145,599千円であります。

(1) アナリティクス及びコグニティブ領域に関する研究

当社の技術戦略として、一昨年から進めている「当社が提供するSI開発、プロダクト及びサービスの提供に付加価値を加えるためのアナリティクス及びコグニティブ領域の先端技術の研究開発への取り組み」を継続しました。

当年度は、昨年度構築した3つのソリューションモデル、

- ・質問応答モデル(Q&A)
- ・自動応答モデル(チャットボット)
- ・お客様の声分析モデル(VoC)

と、これらのソリューションモデルを実証実験でご利用いただくためのPoC環境提供サービスや紹介するためのリーフレット、デモ環境、デモシナリオといったものの活用検証を行いました。また、新たな研究活動として、アナリティクス分野では、これまで進めてきた自然言語テキストの意味検索・クラスタリング、並びにタグ付け、関係付け、回帰分析による相関把握などへの取り組みを更に深めるとともに、お客様でのAI活用に一歩踏み込んだ研究として、クラスタリングや関係付け結果をもとにしたスコアリングに取り組みました。コグニティブ分野としては、画像認識やディープラーニング技術の一つであるLSTM（Long short-term memory）を活用した異常検知に取り組みました。

当年度下期からは、IBM Watson Explorerとこれに関連する要素技術を継続して研究していく部隊を、より事業ラインに近い場所に配置し、事業展開に向けた準備を進めています。また、当社内で保有するデータと研究開始時から培った技術を活用し、当社内でのAI活用についての研究にも取り組みをはじめました。

・スコアリング

文書の中にある重要なワードの出現頻度と他のワードや関連する情報との相関等から得られる特徴量を捉え、数値化して利用者に提供する。

・LSTMを活用した異常検知

ある事象が発生する時系列データを学習した予測推測モデルが、（その事象が発生しない）異常や危険度を判定し、利用者に通知する

(2) ブロックチェーンに関する研究

当年度下期より新たにブロックチェーンの研究開発に取り組み始めました。ブロックチェーンは、暗号通貨を支える基盤技術、金融業界でのIT活用（FinTech）の1つの要素として取り上げられることが多い技術ですが、当社においては、金融に限らず、幅広いお客様に提供できる「ソフトウェア基盤（プラットフォーム）」の構築に取り組み、そのプラットフォームを支える技術としてブロックチェーンを捉えています。

現在、オープンソースのブロックチェーンのプラットフォームがいくつか存在しており、それらを調査分析し、暗号通貨に特化している部分や、複雑な機能となっている部分をシンプルにして、様々な業種、業務、業態に適用可能な機能構築の研究開発に取り組んでいます。昨年末、ブロックチェーン推進協会（BCCC）へ入会し、BCCCを通じてブロックチェーン技術の知見を深め、業界をあげてのブロックチェーン技術の普及や推進の取り組みにも貢献していきます。

次年度は、社内において、当社プラットフォームを用いたシステムの実証実験に取り組みます。また、お客様に当社のブロックチェーンへの取り組みを紹介するリーフレットやデモ環境を整備していき、お客様の声に応えるサービスの企画・検討を進めていく予定です。

(3) RPAツールの付加価値の研究

当年度より、RPAツールに関する研究開発に取り組み始めました。

RPAツールをご利用になられるお客様が抱える課題を解決できるようにするため、当社内の複数部門の業務においてRPAツールを適用する社内トライアルを実施しました。

今回の社内トライアルを通じて、RPAツールを導入するまでに必要なステップである、業務の流れを整理、可視化した上で、ロボット化する業務の選定を行い、新しい流れがどのようなようになるのかを明確にし、期待通りの成果を得られるかを事前に検証できました。

次年度以降は、RPAツールはもとより、「業務」をキーワードに、お客様の現行業務の可視化、新業務の作成までを含めて如何に手厚くサポート出来るかについて引き続き取り組んでまいります。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当社グループの設備投資については、ソフトウェア開発のためのコンピュータ機器等の設備が必要になりますが、リースで対応しており、それ以外は特にありません。

2 【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2019年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の 内容	帳簿価額(千円)				従業員数 (名)
			建物	工具、器具 及び備品	リース資産	合計	
本社 (大阪市中央区)	I T サービス	事務所 設備	30,678	17,922	150,821	199,422	529
東京本社 (東京都江東区)	I T サービス	事務所 設備	44,865	5,235	2,120	52,221	424
名古屋支社 (名古屋市中村区)	I T サービス	事務所 設備	10,617	1,451	167	12,235	92

(注) 1. 上記の事務所建物については賃借しており年間賃借料は447,659千円であります。
2. 現在休止中の設備はありません。

(2) 国内子会社

主要な設備はありません。

(3) 在外子会社

主要な設備はありません。

3 【設備の新設、除却等の計画】

特に記載すべき事項はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	60,000,000
計	60,000,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2019年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2019年6月21日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	20,000,000	20,000,000	東京証券取引所 (市場第二部)	株主としての権利内容に制限のない、標準となる株式であり、単元株式数は100株であります。
計	20,000,000	20,000,000	—	—

(2) 【新株予約権等の状況】

① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

② 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③ 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
2014年8月1日 (注) 1	10,021,504	21,815,104	—	3,775,100	—	2,232,620
2016年11月30日 (注) 2	△1,815,104	20,000,000	—	3,775,100	—	2,232,620

(注) 1. 2014年8月1日に、吸収合併の方式により株式会社アクセスとの経営統合（合併比率1：5,308）を行ったことに伴う増加であります。

2. 自己株式の消却による減少であります。

(5) 【所有者別状況】

2019年3月31日現在

2019年3月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）								単元未満株式の状況（株）
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数（人）	－	8	25	40	21	1	2, 122	2, 217	－
所有株式数（単元）	－	18, 647	3, 874	56, 582	4, 057	212	116, 495	199, 867	13, 300
所有株式数の割合（％）	－	9. 33	1. 94	28. 31	2. 03	0. 11	58. 29	100. 0	－

(注) 1. 自己株式1,572,061株は、「個人その他」に15,720単元、「単元未満株式の状況」に61株含まれております。

2. 上記「その他の法人」には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が430単元及び64株含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
株式会社ZEN	兵庫県西宮市	1,851	10.04
日本電気株式会社	東京都港区芝5丁目7番1号	1,605	8.71
明治安田生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内2丁目1番1号	1,061	5.76
丸山幸男	群馬県館林市	994	5.39
NCS&A従業員持株会	大阪府中央区城見1丁目3番7号	692	3.76
株式会社日本信用情報機構	東京都台東区北上野1丁目10番14号	530	2.88
小路口謙治	大阪府豊中市	425	2.31
株式会社クリナム	東京都中央区日本橋箱崎町17番1号	398	2.16
アイ・システム株式会社	東京都千代田区九段南4丁目8番13号	398	2.16
梶川融	東京都渋谷区	397	2.16
計	—	8,354	45.34

(注) 上記のほか当社所有の自己株式1,572千株があります。

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2019年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 1,572,000	—	株主としての権利内容に制限のない、標準となる株式
完全議決権株式(その他)	普通株式 18,414,700	184,147	同上
単元未満株式	普通株式 13,300	—	同上
発行済株式総数	20,000,000	—	—
総株主の議決権	—	184,147	—

(注) 1. 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が43,000株含まれております。

また、「議決権の数」欄には、同機構名義の完全議決権株式に係る議決権の数430個が含まれております。

2. 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式61株が含まれております。

② 【自己株式等】

2019年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有 株式数の割合(%)
(自己保有株式) N C S & A株式会社	大阪市中央区城見 1丁目3番7号	1,572,000	—	1,572,000	7.86
計	—	1,572,000	—	1,572,000	7.86

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(千円)
当事業年度における取得自己株式	230	95
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取による株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(千円)	株式数(株)	処分価額の総額(千円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他(譲渡制限付株式の譲渡による処分)	24,500	6,829	—	—
保有自己株式数	1,572,061	—	1,572,061	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの買取及び売渡による株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当社は、収益力の向上、財務体質の強化を図ることで安定的な配当を継続することが重要と考えております。剰余金の配当につきましては、連結配当性向35%以上を目標に収益状況に対応した配当を行うことを基本として、キャッシュ・フローの状況、内部留保などを勘案して決定いたします。

自社株式の取得につきましても、株主の皆様に対する有効な利益還元のひとつと考えており、株価の動向や財務状況等を考慮しながら適切に対応してまいります。

当社は、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を基本方針としており、これらの剰余金の配当についての決定機関は、取締役会であります。

当事業年度の剰余金の配当につきましては、上記の方針に基づき1株当たりの期末配当を12円としております。

内部留保資金につきましては、プロフェッショナル人材の育成、中長期的視点に立った先進技術等の研究開発、生産力・品質力向上及び事業推進を円滑にするためのインフラ整備等に投資し、継続的な成長に向けて企業総合力とグループ事業基盤の強化に努めてまいります。

当社は、「剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めがある場合を除き、取締役会の決議により定める。」旨を定款に定めております。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (千円)	1株当たり配当額 (円)
2019年5月14日 取締役会決議	221,135	12

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

当社のコーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方は、企業倫理とコンプライアンスの重要性を認識し、企業の社会的責任を全うすることを経営上の最も重要な課題のひとつとして位置づけており、このことが、株主価値を高めることのひとつとも認識しております。

また、株主・投資家へは、会社情報の適時開示に係る社内体制により、迅速かつ正確な情報開示に努めるとともに、経営の透明性を高めてまいります。

以下の事項は提出日（2019年6月21日）現在におけるものであります。

```

graph TD
    A[株主・投資家等] --> B[株主総会]
    B -- "選任・解任" --> C[監査役会  
(監査役)]
    B -- "選任・解任" --> D[取締役会  
(取締役)]
    B -- "選任・解任" --> E[会計監査人]
    C -- "連携" --> E
    C -- "監査" --> D
    D -- "諮問" --> F[指名・報酬委員会]
    F -- "答申" --> D
    D -- "選定・監督" --> G[社長]
    E -- "連携" --> H[内部監査部門]
    E -- "会計監査" --> I[ ]
    H -- "連携" --> C
    H -- "内部監査" --> J[各業務執行部門・グループ会社]
    G --> K[経営会議]
    K --> L[コンプライアンス委員会  
情報セキュリティ委員会  
品質マネジメントシステム  
推進委員会  
内部統制委員会]
    L --> G
    G --> J
    M[顧問弁護士] -- "指導・助言" --> J
  
```

イ 企業統治の体制の概要

当社は、監査役制度を採用しており、取締役、監査役を中心として、コーポレート・ガバナンスの強化に努めております。

a. 取締役・取締役会

取締役会は、当社の規模等に鑑み機動性を重視し、現在社外取締役2名を含む6名の体制をとっております。取締役会は原則月1回の定例取締役会のほか、必要に応じ臨時取締役会を開催し、法令で定められた事項や、経営に関する重要事項を決定するとともに、業務執行の状況を監督しております。また、取締役会の諮問機関として、代表取締役及び社外取締役並びに社外監査役で構成された指名・報酬委員会を設置しており、取締役等の人事と報酬に関して審議しております。

b. 経営会議

当社は、取締役会への付議事項の事前審議及び取締役会の決定した基本方針に基づき、その業務執行方針・計画・重要な業務の実施等に関する協議機関として取締役5名（社外取締役1名含む）と各業務執行部門長17名と常勤監査役1名で構成される経営会議を、原則月1回開催しております。

c. 業務執行

当社は、「経営の意思決定及び監督機能」と「業務執行」を分離し、監督機能である取締役会とは別に、執行役員による機動的な業務執行を図るための執行役員制度を導入しております。

d. 内部統制システムの整備の状況

代表取締役社長は、監査役会及び会計監査人と定期的に会合し、コンプライアンス面や内部統制の整備状況などについて意見交換を行っております。

NCS&Aグループ全体でのコンプライアンス重視の企業風土の醸成及び浸透を図るため、「NCS&Aグループコンプライアンス基本方針」のもと、「NCS&Aグループコンプライアンス管理規程」「内部通報規程」を制定し運用しております。なお、コンプライアンスを推進する体制として、「実施統括責任者」としてコンプライアンス担当執行役員を任命するとともに、「コンプライアンス委員会」を設置しております。

当社は「ディスクロージャーポリシー」を定め、適時開示情報の適正性を確保するとともに、企業情報の迅速な適時開示に努めております。

グループ会社の経営管理については、四半期毎に当社経営会議でグループ会社社長による事業状況の報告を行うとともに、「関係会社管理規程」に基づき、重要な事項については当社取締役会または当社代表取締役社長へ随時報告する体制としております。

グループ会社へ当社より取締役及び監査役を派遣することにより、効率的業務の遂行及び業務の適正適法を監視できる体制を構築しております。

当社グループに属する会社間の取引は、法令・会計原則・税法その他の社会規範に照らし適切性を確保しております。

e. リスク管理体制の整備の状況

顧問弁護士からは、日常業務において発生する法的リスクに対するアドバイスを受けております。

当社は個人情報保護のため、個人情報保護方針を定めるとともに、情報セキュリティの維持・向上を図ることを目的として、「情報セキュリティ委員会」を設置しております。

当社は品質マネジメントシステムの計画、実施、測定・分析を推進し、有効性の継続的改善を行うことを目的として、「品質マネジメントシステム推進委員会」を設置しております。

当社は事業遂行上のリスクマネジメントシステムの適切な構築と運用及び部門横断的なリスク管理の推進を目的として、リスクマネジメント室を設置しております。

ロ 当該体制を採用する理由

当社は取締役6名のうち2名を社外取締役としています。社外取締役は、監査役会、内部監査・内部統制委員会等と連携を図ることで、経営に対する監督機能を発揮しております。また、当社は、監査役3名のうち2名を社外監査役としています。社外監査役は、公正普遍の立場から、適正な業務執行の監視を行い、経営の健全性を高めています。当社は、これらのコーポレート・ガバナンス体制により、経営の監視機能は十分に機能していると考えております。

③ 企業統治に関するその他の事項

剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めがある場合を除き、取締役会の決議により定める旨定款に定めております。これは、剰余金の配当等を取締役会の権限とすることにより、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とするものであります。

取締役の定数は、15名以内とする旨定款に定めております。

取締役の選任決議については、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款に定めております。また、取締役の選任決議は、累積投票によらない旨を定款に定めております。

取締役と監査役の責任免除については、職務の遂行にあたり期待される役割を十分に発揮できるようにするため、会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる取締役（取締役であったものを含む。）及び監査役（監査役であったものを含む。）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨定款に定めております。

責任限定契約の内容の概要については、社外取締役として有用な人材を迎えることができるように、また社外監査役が期待される役割を十分発揮することができるようにするため、2006年6月29日開催の第40期定時株主総会で定款を変更し、社外取締役及び社外監査役の責任限定契約に関する規定を設けております。当該定款に基づき、当社社外取締役及び社外監査役全員と責任限定契約を締結しており、その概要は次のとおりであります。

「社外取締役及び社外監査役は、本契約締結後、会社法第423条第1項の責任について、その職務を行うにつき善意でありかつ重大な過失がなかったときは、会社法第425条第1項に定める最低責任限度額の損害賠償を負担するものとする。」

株主総会の特別決議要件については、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

① 役員一覧

男性9名 女性一名 (役員のうち女性の比率一%)

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
代表取締役 会長	松 木 謙 吾	1951年12月10日生	1993年12月 1994年1月 1996年4月 1997年6月 2000年6月 2004年5月 2005年4月 2018年4月	日本アイ・ビー・エム株式会社退社 当社入社 事業企画推進本部長 取締役事業企画推進本部長 常務取締役 代表取締役専務 代表取締役社長 代表取締役会長 (現任)	1年 (注)3	161
代表取締役 社長	辻 隆 博	1960年6月6日生	1983年4月 2009年4月 2010年4月 2014年4月 2014年6月 2015年6月 2017年6月 2018年4月	当社入社 ソリューション事業本部営業事業部長 執行役員第三事業本部ソリューション営業事業部長 執行役員第二事業本部長 取締役執行役員第二事業本部長 執行役員常務エンタープライズ事業本部長 取締役執行役員常務エンタープライズ事業本部管掌 代表取締役社長 (現任)	1年 (注)3	21
取締役 執行役員専務	山 口 満 之	1955年4月10日生	1979年4月 2006年4月 2009年4月 2011年6月 2012年4月 2014年4月 2015年4月 2016年4月 2017年4月 2019年4月	当社入社 ソリューション事業本部営業事業部長 執行役員名古屋支社長 取締役執行役員第三事業本部長 取締役執行役員第二事業本部長 取締役執行役員常務統合推進担当 取締役執行役員常務テクノロジー・サービス事業本部管掌 取締役執行役員常務管理本部長 取締役執行役員専務管理本部長 取締役執行役員専務CHRO (チーフヒューマンリソースオフィサー) (現任)	1年 (注)3	64
取締役 執行役員常務	河 上 正	1962年7月19日生	1994年8月 2003年6月 2004年12月 2007年6月 2010年7月 2013年6月 2014年8月 2015年4月 2015年6月 2018年4月 2018年6月 2019年4月	株式会社アクセス入社 同社取締役 同社常務取締役 同社取締役辞任 同社執行役員 同社取締役 取締役執行役員第三事業本部長 取締役執行役員常務ファイナンシャル事業本部長 執行役員常務ファイナンシャル事業本部長 執行役員常務ファイナンシャル・サービス事業本部管掌 取締役執行役員常務ファイナンシャル・サービス事業本部管掌 取締役執行役員常務CMO (チーフマーケティングオフィサー) (現任)	1年 (注)3	35

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
取締役	重 松 孝 司	1948年10月26日生	1971年9月 1981年7月 1995年6月 2007年7月 2009年9月 2010年6月 2012年7月 2013年6月 2014年6月	昭和監査法人（現EY新日本有限責任監査法人）入社 公認会計士登録 太田昭和監査法人（現EY新日本有限責任監査法人）代表社員 新日本監査法人（現EY新日本有限責任監査法人）常任理事 重松公認会計士事務所開設 代表（現任） 株式会社アクセス社外監査役 大阪市公正職務審査委員会委員 ワタベウエディング株式会社社外監査役（現任） 当社社外取締役（現任）	1年 (注)3	6
取締役	大 森 京 太	1948年3月14日生	1972年4月 2003年5月 2007年10月 2008年6月 2010年10月 2010年12月 2011年7月 2015年6月 2017年12月 2017年12月 2018年6月	株式会社三菱銀行入行 株式会社東京三菱銀行常務取締役 株式会社三菱東京UFJ銀行専務執行役員 株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ取締役副社長 同社取締役 株式会社三菱総合研究所代表取締役社長 三菱総研DCS株式会社取締役会長 当社社外取締役（現任） 株式会社三菱総合研究所取締役会長（現任） 三菱総研DCS株式会社取締役 株式会社アイネス社外取締役（現任）	1年 (注)3	-
常勤監査役	山 下 政 司	1961年4月28日生	1986年8月 2006年4月 2008年4月 2010年4月 2012年4月 2012年4月 2012年6月 2016年6月	当社入社 業務推進部長 計画管理部長兼ソフトウェア購買部長 執行役員経営管理室長 執行役員管理本部長 恩喜愛思（上海）計算機系統有限公司董事長 取締役執行役員管理本部長 常勤監査役（現任）	4年 (注)4	26
監査役	大 西 寛 文	1946年1月1日生	1971年11月 1975年3月 1993年3月 2001年6月 2001年7月 2004年7月 2006年4月 2011年6月 2015年6月 2016年6月	等松青木監査法人（現有限責任監査法人トーマツ）入所 公認会計士登録 監査法人トーマツ（現有限責任監査法人トーマツ）代表社員 日本公認会計士協会近畿会会長 日本公認会計士協会本部副会長 日本公認会計士協会本部監事 立命館大学大学院経営管理研究科教授 積水化学工業株式会社社外監査役 株式会社ジーエス・ユアサコーポレーション社外取締役（現任） 当社社外監査役（現任）	4年 (注)4	-

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
監査役	吉 川 興 治	1950年2月8日生	1978年4月 2000年4月 2004年4月 2005年7月 2009年1月 2010年1月 2010年3月 2014年6月 2017年6月	検事任官（大阪地方検察庁） 大阪地方検察庁特別捜査部副部長 最高検察庁検事 大阪地方検察庁次席検事 神戸地方検察庁検事正 検事退官 弁護士登録 日本金銭機械株式会社社外取締役 (現任) 当社社外監査役(現任)	4年 (注) 5	-
計						316

- (注) 1. 取締役 重松孝司、大森京太は、社外取締役であります。
2. 監査役 大西寛文、吉川興治は、社外監査役であります。
3. 任期は、2019年3月期に係る定時株主総会終結の時から2020年3月期に係る定時株主総会終結の時までの1年であります。
4. 任期は、2016年3月期に係る定時株主総会終結の時から2020年3月期に係る定時株主総会終結の時までの4年であります。
5. 任期は、2017年3月期に係る定時株主総会終結の時から2021年3月期に係る定時株主総会終結の時までの4年であります。
6. 当社は、「経営の意思決定及び監督機能」と「業務執行」を分離し、監督機能である取締役会とは別に、執行役員による機動的な業務執行を図るための執行役員制度を導入しております。執行役員は取締役2名、及び、常務ITサービス事業本部長 木下幸夫、常務エンタープライズ事業本部長 成田昌浩、常務経営戦略室長 小林裕明、常務管理本部長、技術戦略推進室長 山本貴子、アウトソーシング事業推進室長 七野広高、ITサービス事業本部第一事業部長 小崎正己、エンタープライズ事業本部第五事業部長 嗣野政弘、ITサービス事業本部第三事業部長 森本豊の8名、計10名で構成されております。
7. 当社は、法令に定める監査役の員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役1名を選任しております。補欠監査役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
里井 義昇	1962年12月10日生	1996年4月 1996年4月 2006年2月 2015年6月 2015年6月 2016年12月	弁護士登録(大阪弁護士会) 高木茂太市法律事務所入所 象印マホービン株式会社社外監査役 当社社外監査役 東洋紡株式会社社外監査役 やさか法律事務所入所	(注)	5

(注) 補欠監査役の任期は、就任した時から退任した監査役の任期の満了の時までであります。

② 社外役員の状況

当社の社外取締役は2名であり、当社の経営上のアドバイスや指導が期待できるため、当業界において十分な知識と経験を有し見識が深い社外取締役を選任しております。また、経営の透明性を強化するため、当社との間で役員報酬を除いた特別な利害関係を有しておらず、経営者や特定の利害関係者の利益に偏ることなく公平、公正な監督活動を行っていることから、財務及び会計に精通している公認会計士重松孝司、銀行及びシンクタンクにおける経営経験を有する大森京太をそれぞれ社外取締役に選任し、それぞれ独立役員に指定しております。

社外取締役重松孝司は、重松公認会計士事務所の代表を兼職しており、同氏と当社との間に重要な取引関係及び特別な利害関係はありません。

社外取締役大森京太は、株式会社三菱総合研究所取締役会長及び株式会社アイネス取締役を兼職しており、株式会社三菱総合研究所は当社との間でITサービスの提供及びコンサルティング業務において取引関係があります。その他に、同氏と当社との間に重要な取引関係及び特別な利害関係はありません。

当社の社外監査役は2名であり、経営の意思決定機能と取締役による業務執行を管理監督する機能を持つ取締役会に対し、監査役3名のうち2名を社外監査役とすることで独立性を確保するとともに、経営への監視機能を強化しております。また、社外監査役大西寛文、吉川興治と当社との間に重要な取引関係及び特別な利害関係はありません。

社外取締役及び社外監査役を選任するための提出会社からの独立性に関する基準又は方針はないものの、経験や専門的な知見に基づく適切な監督又は監査といった機能及び出身分野における実績と見識からの有益な助言・指導を頂くことを期待し、一般株主と利益相反が生じるおそれがないことを基本的な考え方として選任しております。

なお、社外取締役及び社外監査役による当社株式の保有は「役員の状況」の「所有株式」欄に記載しております。

③ 社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役及び社外監査役による監督又は監査は、取締役会、監査役会において適宜発言と意見交換を行うことにより、監査役監査、内部監査及び会計監査と相互に連携しております。

(3) 【監査の状況】

① 監査役監査の状況

当社は監査役制度を採用しております。

監査役会は常勤監査役1名を含む計3名の体制をとっております。各監査役は監査役会が定めた監査計画及び職務分担に基づき、業務執行の適法性について監査しております。常勤監査役は重要な意思決定の過程及び業務の執行状況を把握するため、重要な会議に出席するとともに、監査に必要な情報の収集を行っております。なお、監査役3名のうち、社外監査役は2名であります。

監査役会は必要に応じ会計監査人を含め、相互に情報及び意見の交換を行うなど連携を強め、監査の質的向上を図っております。

監査役は、代表取締役社長及び会計監査人と定期的に情報・意見を交換する場を設けることにより、監査の実効性を高めております。

監査役は、社外取締役とのミーティングの場を設け、当社の課題等について情報共有し、客観的な立場で意見交換を行っております。

常勤監査役は、「取締役会」「経営会議」のほか、「コンプライアンス委員会」「情報セキュリティ委員会」「内部統制委員会」等の協議の場に参加し、内部統制システムの整備・運用状況を確認しております。

常勤監査役は、内部監査部門である監査室と月例定例会を開催し意見交換を行っております。

常勤監査役の山下政司は、長年にわたり当社取締役執行役員管理本部長として管理部門での経験を重ねてきており、監査役に期待される相当程度の知見を有しております。

② 内部監査の状況

当社は内部監査部門として監査室を設置し、担当者2名で、業務における遂行が各種法令など、当社の各種規程類及び経営計画などに準拠して実施されているか、効果的、効率的に行われているかなどについて調査・チェックし、指導・改善に向けた内部監査を行っております。

監査室は、監査役会と月例定例会を開催し意見交換を行っております。

監査室は必要に応じ会計監査人を含め、相互に情報及び意見の交換を行うなど連携を強め、監査の質的向上を図っております。

③ 会計監査の状況

a. 監査法人の名称

有限責任監査法人トーマツ

b. 業務を執行した公認会計士

指定有限責任社員 業務執行社員 吉村 祥二郎

指定有限責任社員 業務執行社員 樋野 智也

c. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士7名、会計士試験合格者等2名、その他4名であります。

d. 監査法人の選定方針と理由

当社の監査役会が有限責任監査法人トーマツを会計監査人の候補者とした理由は、同監査法人の独立性及び専門性、監査の実施状況、品質管理体制、監査報酬等を総合的に勘案した結果、適任と判断したためであります。

会計監査人の職務の執行に支障がある場合等、その必要があると判断した場合に、株主総会に提出する会計監査人の解任又は不再任に関する議案の内容を決定します。また、監査役会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号のいずれかに該当すると認められる場合に、監査役全員の同意に基づき監査役会が会計監査人を解任いたします。この場合、監査役会が選定した監査役は、解任後最初に招集される株主総会において、会計監査人を解任した旨と解任の理由を報告いたします。

e. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

当社の監査役及び監査役会は、監査法人に対して評価を行っております。この評価については、会計監査人に対して、監査法人の概要・コンプライアンス・規制当局検査等の状況・監査品質確保のための体制・次期監査方針等について説明を求め、監査役会で決議した評価基準にて評価を行うものです。その結果として、会計監査人の職務の遂行が適正に実施されることが確保できると評価しております。

④ 監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	(非監査業務に基づく報酬(千円))
提出会社	31,500	—	31,000	1,000
連結子会社	—	—	—	—
計	31,500	—	31,000	1,000

当社における非監査業務の内容は、企業会計基準第29号「収益認識に関する会計基準」の適用による会計方針の検討に関する助言・指導業務であります。

b. 監査公認会計士等と同一のネットワークに対する報酬 (a. を除く)

該当事項はありません。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬の決定方針としては、代表取締役が監査役会の同意を得て定める旨を定款に定めております。

e. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査役会は、会計監査人の監査計画の内容、前期の監査実績の評価・分析、会計監査の職務遂行状況並びに報酬見積の積算根拠の相当性について必要な検証を行ったうえ、会計監査人の報酬等の額について同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

① 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社の役員の報酬等は、役員の中長期的な業績向上への意欲を高め、持続的な企業価値増大に寄与するよう、固定報酬と業績連動報酬で構成しております。なお、社外役員は固定報酬のみとしております。

当社の役員の報酬等に関しては、2006年6月29日開催の第40期定時株主総会において、取締役については年額2億40百万円以内（使用人兼務取締役の使用人分給与は含まない。同定時株主総会終結時の取締役の員数は9名）、監査役については年額36百万円以内と決議しております（同定時株主総会終結時の監査役の員数は4名）。

固定報酬は、それぞれの責務の大きさを勘案し、役職に応じた基準を定めております。業績連動報酬は、短期的なインセンティブである賞与（現金）と中長期的なインセンティブである株式報酬（譲渡制限付株式報酬）で構成しており、賞与は営業利益達成率及び役割達成度を加味した取締役ごとの評価、株式報酬は前年度評価を含めた期待値を加味した取締役ごとの評価を指標としております。

取締役の報酬は、固定報酬及び業績連動報酬を含めて、株主総会で承認された報酬限度額の範囲内において、前述の評価指標を踏まえて指名・報酬委員会（任意の委員会）による審議のうえ取締役会に諮り、取締役会議長が決定しております。なお、当事業年度における業績連動報酬は賞与（現金）のみであります。

監査役の報酬は、株主総会で承認された報酬限度額の範囲内において、監査役会での協議により決定しております。

評価指標については、本業における業績を報酬に反映するために、営業利益の達成割合を指標にするとともに、業績面だけでなく取締役ごとの役割遂行状況に応じた定性的な評価も合わせて総合的に勘案しております。なお、期首の連結営業利益の目標4億円に対して当連結会計年度の連結営業利益の実績は6億88百万円となり、営業利益達成率は172.1%となりました。

指名・報酬委員会は、取締役会の任意の諮問機関として当連結会計年度において4回開催し、取締役の報酬等に関する方針及び報酬制度に係る審議及び取締役への答申を実施しております。

② 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額（千円）			対象となる 役員の員数 (名)
		固定報酬	業績連動報酬	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く。)	211,485	159,585	51,900	—	7
監査役 (社外監査役を除く。)	17,900	15,300	2,600	—	1
社外役員	16,800	16,800	—	—	4

③ 役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

④ 使用人兼務役員の使用人給与

該当事項はありません。

(5) 【株式の保有状況】

① 投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、投資株式について、専ら株式の価値の変動又は配当の受領によって利益を得ることを目的として保有する株式を純投資目的である投資株式、それ以外の株式を純投資目的以外の目的である投資株式（政策保有株式）に区分しております。

② 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は取引先との安定的・長期的な取引関係の構築、協業関係の強化等の観点から、当社の中長期的な企業価値の向上に資すると判断する場合を除き、政策保有株式を縮減する方針であります。保有する意義や経済合理性等については、取締役会にて検証を行うとともに、個々に峻別を行います。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(千円)
非上場株式	6	94,026
非上場株式以外の株式	12	719,524

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(千円)	株式数の増加の理由
非上場株式	—	—	—
非上場株式以外の株式	2	1,036	持株会による抛出及び株式分割

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

該当事項はありません。

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
アズワン(株)	31,729	31,729	(保有目的) 安定的な取引関係の構築 (定量的な保有効果) (注) 1	有
	279,215	215,122		
三井住友トラスト・ホールディングス(株)	29,800	29,800	(保有目的) 安定的な取引関係の構築 (定量的な保有効果) (注) 1	無 (注) 2
	118,484	128,348		
日本金銭機械(株)	66,000	66,000	(保有目的) 安定的な取引関係の構築 (定量的な保有効果) (注) 1	有
	78,078	76,758		
日本コンピュータ・ダイナミクス(株)	62,000	62,000	(保有目的) 安定的な取引関係の構築 (定量的な保有効果) (注) 1	有
	61,318	81,592		
(株)C a s a	44,000	22,000	(保有目的) 安定的な取引関係の構築 (定量的な保有効果) (注) 1 (株式数が増加した理由) 株式分割による増加	無
	46,508	47,850		
(株)三井住友フィナンシャルグループ	10,000	10,000	(保有目的) 安定的な取引関係の構築 (定量的な保有効果) (注) 1	無 (注) 3
	38,760	44,580		
(株)電響社	26,250	26,250	(保有目的) 安定的な取引関係の構築 (定量的な保有効果) (注) 1	有
	32,602	41,921		
東洋テック(株)	19,000	19,000	(保有目的) 安定的な取引関係の構築 (定量的な保有効果) (注) 1	有
	21,812	22,857		
キャノンマーケティングジャパン(株)	8,998	8,565	(保有目的) 安定的な取引関係の構築 (定量的な保有効果) (注) 1 (株式数が増加した理由) 取引先持株会による取得	無
	19,588	24,615		
ダイワボウホールディングス(株)	2,400	2,400	(保有目的) 安定的な取引関係の構築 (定量的な保有効果) (注) 1	無 (注) 4
	15,288	11,196		
(株)りそなホールディングス	13,400	13,400	(保有目的) 安定的な取引関係の構築 (定量的な保有効果) (注) 1	無 (注) 5
	6,427	7,530		
丸三証券(株)	2,205	2,205	(保有目的) 安定的な取引関係の構築 (定量的な保有効果) (注) 1	有
	1,442	2,224		

(注) 1. 当社は、特定投資株式における定量的な保有効果の記載が困難であります。保有の合理性につきましては、個別の政策保有株式について政策保有の意義を検証しており、その結果、現状保有する政策保有株式はいずれも保有方針に沿った目的で保有していることを確認しております。

2. 三井住友トラスト・ホールディングス株式会社は当社株式を保有しておりませんが、同社子会社である三井住友信託銀行株式会社は当社株式を保有しております。
3. 株式会社三井住友フィナンシャルグループは当社株式を保有しておりませんが、同社子会社である株式会社三井住友銀行は当社株式を保有しております。
4. ダイワボウホールディングス株式会社は当社株式を保有しておりませんが、同社子会社であるダイワボウ情報システム株式会社は当社株式を保有しております。
5. 株式会社りそなホールディングスは当社株式を保有しておりませんが、同社子会社である株式会社関西みらい銀行は当社株式を保有しております。

③ 保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

④ 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの

該当事項はありません。

⑤ 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの

該当事項はありません。

第5 【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号。以下、「連結財務諸表規則」という。）に基づいて作成しております。

なお、当連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表に含まれる比較情報のうち、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」（平成30年3月23日内閣府令第7号。以下「改正府令」という。）による改正後の連結財務諸表規則第15条の5第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第3条第2項により、改正前の連結財務諸表規則に基づいて作成しております。

- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下、「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。

なお、当事業年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の財務諸表に含まれる比較情報のうち、改正府令による改正後の財務諸表等規則第8条の12第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第2条第2項により、改正前の財務諸表等規則に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準の変更等について適確に対応できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、同団体等の主催するセミナーに参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	6,779,858	7,760,271
受取手形及び売掛金	※1 4,758,700	※1 5,217,935
有価証券	217,670	—
商品	138,071	459,528
仕掛品	※4 274,971	※4 335,253
その他	260,463	226,408
貸倒引当金	△227	△268
流動資産合計	12,429,507	13,999,128
固定資産		
有形固定資産		
リース資産（純額）	172,683	156,152
その他（純額）	182,042	187,389
有形固定資産合計	※3 354,726	※3 343,542
無形固定資産	473,734	454,036
投資その他の資産		
投資有価証券	※2 964,533	※2 917,131
繰延税金資産	94,473	113,097
差入保証金	258,544	247,103
その他	379,039	547,129
貸倒引当金	△70,291	△70,291
投資その他の資産合計	1,626,300	1,754,171
固定資産合計	2,454,761	2,551,749
資産合計	14,884,269	16,550,878

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	※1 633,777	※1 777,017
1年内返済予定の長期借入金	69,412	30,361
リース債務	69,304	72,328
未払金	1,243,161	1,204,013
未払法人税等	100,593	345,266
賞与引当金	342,395	847,481
役員賞与引当金	3,300	67,172
受注損失引当金	※4 16,335	※4 3,342
その他	494,389	842,233
流動負債合計	2,972,668	4,189,216
固定負債		
長期借入金	16,756	30,008
リース債務	128,335	104,062
退職給付に係る負債	3,119,065	3,611,247
長期末払金	21,970	21,970
繰延税金負債	57,102	10,687
固定負債合計	3,343,229	3,777,975
負債合計	6,315,898	7,967,192
純資産の部		
株主資本		
資本金	3,775,100	3,775,100
資本剰余金	5,799,651	4,738,134
利益剰余金	△554,267	935,538
自己株式	△444,957	△438,223
株主資本合計	8,575,527	9,010,549
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	183,430	190,363
為替換算調整勘定	13,838	6,032
退職給付に係る調整累計額	△204,424	△623,259
その他の包括利益累計額合計	△7,156	△426,863
純資産合計	8,568,371	8,583,686
負債純資産合計	14,884,269	16,550,878

② 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4 月 1 日 至 2018年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4 月 1 日 至 2019年 3 月31日)
売上高	18,792,566	20,457,182
売上原価	14,539,436	15,689,118
売上総利益	4,253,129	4,768,064
販売費及び一般管理費		
役員報酬	261,499	277,076
役員賞与引当金繰入額	3,300	67,172
給料手当及び賞与	1,797,048	1,594,346
賞与引当金繰入額	56,706	215,182
退職給付費用	188,287	129,548
福利厚生費	556,426	512,416
賃借料	189,142	172,021
旅費及び交通費	115,517	109,438
貸倒引当金繰入額	△83	41
研究開発費	※1 113,116	※1 145,599
その他	890,764	856,968
販売費及び一般管理費合計	4,171,725	4,079,810
営業利益	81,403	688,253
営業外収益		
受取利息及び配当金	21,019	20,768
保険配当金	72,360	76,879
その他	14,210	12,674
営業外収益合計	107,590	110,322
営業外費用		
支払利息	2,131	1,423
投資有価証券売却損	—	1,301
為替差損	—	3,284
その他	892	757
営業外費用合計	3,023	6,766
経常利益	185,970	791,810
特別利益		
関係会社清算益	※2 34,418	—
特別利益合計	34,418	—
特別損失		
訴訟関連損失	※3 32,200	—
減損損失	※4 195,529	—
特別損失合計	227,729	—
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失(△)	△7,340	791,810
法人税、住民税及び事業税	48,592	286,608
法人税等調整額	1,056,563	△68,094
法人税等合計	1,105,155	218,514
当期純利益又は当期純損失(△)	△1,112,496	573,295
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失(△)	△1,112,496	573,295

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期純利益又は当期純損失 (△)	△1,112,496	573,295
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	90,334	6,932
為替換算調整勘定	△31,081	△7,805
退職給付に係る調整額	△21,770	△418,834
その他の包括利益合計	※1 37,482	※1 △419,707
包括利益	△1,075,013	153,588
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	△1,075,013	153,588
非支配株主に係る包括利益	—	—

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	3,775,100	5,799,356	707,439	△352,436	9,929,460
当期変動額					
欠損填補					—
剰余金の配当			△149,210		△149,210
親会社株主に帰属する当期純損失(△)			△1,112,496		△1,112,496
自己株式の取得				△100,150	△100,150
自己株式の処分		294		7,629	7,924
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	—	294	△1,261,707	△92,520	△1,353,933
当期末残高	3,775,100	5,799,651	△554,267	△444,957	8,575,527

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利益 累計額合計	
当期首残高	93,095	44,919	△182,653	△44,638	9,884,821
当期変動額					
欠損填補					—
剰余金の配当					△149,210
親会社株主に帰属する当期純損失(△)					△1,112,496
自己株式の取得					△100,150
自己株式の処分					7,924
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	90,334	△31,081	△21,770	37,482	37,482
当期変動額合計	90,334	△31,081	△21,770	37,482	△1,316,450
当期末残高	183,430	13,838	△204,424	△7,156	8,568,371

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	3,775,100	5,799,651	△554,267	△444,957	8,575,527
当期変動額					
欠損填補		△916,509	916,509		—
剰余金の配当		△147,229			△147,229
親会社株主に帰属する当期純利益			573,295		573,295
自己株式の取得				△95	△95
自己株式の処分		2,221		6,829	9,051
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	△1,061,516	1,489,805	6,733	435,022
当期末残高	3,775,100	4,738,134	935,538	△438,223	9,010,549

	その他の包括利益累計額				純資産合計
	その他有価証券評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	183,430	13,838	△204,424	△7,156	8,568,371
当期変動額					
欠損填補					—
剰余金の配当					△147,229
親会社株主に帰属する当期純利益					573,295
自己株式の取得					△95
自己株式の処分					9,051
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	6,932	△7,805	△418,834	△419,707	△419,707
当期変動額合計	6,932	△7,805	△418,834	△419,707	15,315
当期末残高	190,363	6,032	△623,259	△426,863	8,583,686

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4 月 1 日 至 2018年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4 月 1 日 至 2019年 3 月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失 (△)	△7,340	791,810
減価償却費	266,973	266,979
減損損失	195,529	—
のれん償却額	—	4,876
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	74,713	72,657
賞与引当金の増減額 (△は減少)	△64,632	505,086
役員賞与引当金の増減額 (△は減少)	△7,150	63,872
受注損失引当金の増減額 (△は減少)	△34,948	△12,992
受取利息及び受取配当金	△21,019	△20,768
支払利息	2,131	1,423
関係会社清算損益 (△は益)	△34,418	—
有価証券及び投資有価証券売却損益 (△は益)	—	1,301
売上債権の増減額 (△は増加)	△175,937	△209,860
たな卸資産の増減額 (△は増加)	182,640	△381,739
仕入債務の増減額 (△は減少)	130,841	102,975
差入保証金の増減額 (△は増加)	△20,223	6,440
保険積立金の増減額 (△は増加)	△23,925	△22,973
未払金の増減額 (△は減少)	△47,882	△110,423
未払消費税等の増減額 (△は減少)	△11,834	85,596
その他	△85,211	5,319
小計	318,305	1,149,580
利息及び配当金の受取額	22,124	21,879
利息の支払額	△2,197	△1,423
法人税等の支払額又は還付額 (△は支払)	△89,882	△21,222
営業活動によるキャッシュ・フロー	248,349	1,148,814

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△115,014	△115,018
定期預金の払戻による収入	115,009	115,014
有価証券及び投資有価証券の取得による支出	△982	△1,036
有価証券及び投資有価証券の売却による収入	3,178	243,687
有価証券の償還による収入	—	20,000
有形固定資産の取得による支出	△12,013	△86,208
無形固定資産の取得による支出	△314,202	△134,613
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による収入	—	47,675
その他	△11,124	△16,876
投資活動によるキャッシュ・フロー	△335,148	72,622
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入れによる収入	—	50,000
長期借入金の返済による支出	△125,560	△75,799
リース債務の返済による支出	△82,334	△82,136
配当金の支払額	△149,210	△147,229
自己株式の取得による支出	△100,150	△95
自己株式の売却による収入	7,924	9,051
財務活動によるキャッシュ・フロー	△449,331	△246,209
現金及び現金同等物に係る換算差額	3,344	△7,221
現金及び現金同等物の増減額（△は減少）	△532,785	968,005
現金及び現金同等物の期首残高	7,197,629	6,664,843
現金及び現金同等物の期末残高	※1 6,664,843	※1 7,632,849

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

当社の連結子会社は、エブリ株式会社、NC Sサポート&サービス株式会社、株式会社ファインバス、株式会社フューチャー・コミュニケーションズ、株式会社テクノインフィニタス、恩愛軟件（上海）有限公司の6社であります。

当連結会計年度において株式会社テクノインフィニタスの全株式を取得したことにより、同社を連結の範囲に含めております。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した関連会社数 なし

Tranzax株式会社につきましては、当連結会計年度において第三者割当増資を行ったことによる持分比率の低下に伴い、同社を持分法適用範囲から除外しております。

(2) 持分法を適用しない関連会社数 1社

会社等の名称 アイ・システム株式会社

持分法を適用しない理由

当期純損益及び利益剰余金等に及ぼす影響が軽微であり、かつ全体としても重要性がないため、持分法の適用範囲から除外しております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち、株式会社テクノインフィニタス、恩愛軟件（上海）有限公司の決算日は、12月31日であります。連結財務諸表の作成にあたっては同日現在の財務諸表を使用し、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

1) 満期保有目的の債券

償却原価法(定額法)

2) その他有価証券

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

② たな卸資産

評価基準は原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)

1) 商品

コンピュータ機器……個別法

その他商品……………総平均法又は最終仕入原価法

2) 仕掛品……………個別法

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産（リース資産除く）

定額法

② 無形固定資産（リース資産除く）

1) ソフトウェア

（市場販売目的のソフトウェア）

見込販売数量に基づく償却額と見込有効期間（3年）に基づく均等配分額とを比較し、いずれか大きい額を償却する方法

（社内利用のソフトウェア）

見込利用可能期間（5年）に基づく定額法

2) 上記以外の無形固定資産

定額法

③ リース資産

（所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産）

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとして算定する定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率法により、貸倒懸念債権等特定の債権については財務内容評価法によって回収不能見込額を計上しております。

② 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

③ 役員賞与引当金

役員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

④ 受注損失引当金

請負契約プロジェクトに係る将来の損失に備えるため、損失発生の可能性が高く、その損失額を合理的に見積ることができる請負契約プロジェクトについて、当該将来損失見込額を引当計上しております。受注損失の発生が見込まれる請負契約プロジェクトについて仕掛品が計上されている場合には、当該将来損失見込額のうち、当該仕掛品残高を限度として仕掛品残高から直接控除し、控除後残額を受注損失引当金に計上しております。

なお、当連結会計年度末の受注損失見込額32,125千円の内28,783千円を仕掛品残高から直接控除した結果、受注損失引当金の当連結会計年度末残高は3,342千円であります。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付に係る負債は、従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における見込額に基づき計上しております。

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の日翌連結会計年度から費用処理することとしております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

受注制作のソフトウェア開発に係る収益及び費用の計上基準

当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められるソフトウェア取引については進行基準（進捗率の見積りは原価比例法）を、その他のソフトウェア取引については完成基準を適用しております。

(6) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

在外子会社の資産・負債及び収益・費用は、在外子会社の決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めております。

(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(8) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

（未適用の会計基準等）

- ・「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 平成30年3月30日）
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日）

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。

ステップ1：顧客との契約を識別する。

ステップ2：契約における履行義務を識別する。

ステップ3：取引価格を算定する。

ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する。

ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当連結会計年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」が49百万円減少し、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」が25百万円増加しております。また、「固定負債」の「繰延税金負債」が23百万円減少しております。

なお、同一納税主体の繰延税金資産と繰延税金負債を相殺して表示しており、変更前と比べて総資産が23百万円減少しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(評価性引当額の合計額を除く。)及び同注解(注9)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前連結会計年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(連結貸借対照表関係)

※1 期末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理しております。

なお、連結会計年度末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形が、期末残高に含まれております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
受取手形	14,318千円	35,685千円
支払手形	22,395千円	58,164千円

※2 関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
投資有価証券(株式)	3,000千円	3,000千円

※3 有形固定資産の減価償却累計額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
有形固定資産の減価償却累計額	333,632千円	400,661千円

※4 損失が見込まれる請負契約プロジェクトに係る仕掛品は、これに対応する以下の受注損失引当金を相殺表示しております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
仕掛品に係るもの	45,326千円	28,783千円

(連結損益計算書関係)

※1 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費の総額は、次のとおりであります。

前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
113,116千円	145,599千円

※2 関係会社清算益

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

恩喜愛思(上海)計算機系統有限公司の清算終了に伴い発生したものであります。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

※3 訴訟関連損失

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

当社が開発・製作した基幹ソフトウェアシステムに関して、損害賠償を求められた訴訟において和解が成立したことから発生した解決金(17,200千円)及びその他関連費用であります。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

※4 減損損失

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

当社グループは当連結会計年度において、以下の資産について減損損失を計上しております。

場所	用途	種類	減損損失
大阪府大阪市	事業用資産	ソフトウェア	195,529千円

当社グループは、継続的に収支の把握を行っている管理会計上の区分により資産のグルーピングを行っております。上記の事業用資産につきましては、当初予定していた収益を見込めなくなったため、回収可能性を考慮し減損損失を認識し、特別損失に計上しております。

なお、資産又は資産グループの回収可能額は使用価値によって測定しており、将来キャッシュフローがマイナスの場合は回収可能額をゼロとみなしております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

(連結包括利益計算書関係)

※ 1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	130,934千円	11,291千円
組替調整額	－千円	△1,301千円
税効果調整前	130,934千円	9,989千円
税効果額	△40,599千円	△3,056千円
その他有価証券評価差額金	90,334千円	6,932千円
為替換算調整勘定		
当期発生額	3,336千円	△7,805千円
組替調整額	△34,418千円	－千円
税効果調整前	△31,081千円	△7,805千円
税効果額	－千円	－千円
為替換算調整勘定	△31,081千円	△7,805千円
退職給付に係る調整額		
当期発生額	24,406千円	△450,705千円
組替調整額	32,850千円	31,870千円
税効果調整前	57,256千円	△418,834千円
税効果額	△79,027千円	－千円
退職給付に係る調整額	△21,770千円	△418,834千円
その他の包括利益合計	37,482千円	△419,707千円

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1. 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	20,000,000	—	—	20,000,000

2. 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	1,348,643	275,688	28,000	1,596,331

(変動事由の概要)

増加数の内訳は、次のとおりであります。

取締役会決議による自己株式の取得 275,300株

単元未満株式の買取請求による増加 388株

減少数の内訳は、次のとおりであります。

従業員への譲渡による減少 28,000株

3. 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年5月15日 取締役会	普通株式	149,210	利益剰余金	8.00	2017年3月31日	2017年6月7日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力の発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年5月15日 取締役会	普通株式	147,229	資本剰余金	8.00	2018年3月31日	2018年6月7日

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1. 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	20,000,000	—	—	20,000,000

2. 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	1,596,331	230	24,500	1,572,061

(変動事由の概要)

増加数の内訳は、次のとおりであります。

単元未満株式の買取請求による増加 230株

減少数の内訳は、次のとおりであります。

従業員への譲渡による減少 24,500株

3. 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年5月15日 取締役会	普通株式	147,229	資本剰余金	8.00	2018年3月31日	2018年6月7日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力の発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年5月14日 取締役会	普通株式	221,135	利益剰余金	12.00	2019年3月31日	2019年6月6日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
現金及び預金勘定	6,779,858千円	7,760,271千円
預入期間が3ヵ月を超える 定期預金	△115,014千円	△127,421千円
現金及び現金同等物	6,664,843千円	7,632,849千円

(リース取引関係)

1. ファイナンス・リース取引

(借主側)

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

・有形固定資産

主として、ソフトウェア開発におけるコンピュータ機器（器具備品）であります。

(2) リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

2. オペレーティング・リース取引

(借主側)

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1 年内	273,168千円	287,054千円
1 年超	40,399千円	666,453千円
合計	313,567千円	953,508千円

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については原則、短期的な預金等としており、また、資金調達については銀行等金融機関からの借入による方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。当該リスクに関しては、与信管理規程に沿ってリスク低減を図っております。有価証券及び投資有価証券は主として株式、債券、投資信託であり、市場価格の変動リスクに晒されております。当該リスクに関しては、定期的に時価を把握し、明細表を作成する等の方法により管理しており、また、その内容を取締役会に報告しております。

営業債務である支払手形及び買掛金並びに未払金は、そのほとんどが3ヵ月以内の支払期日であります。借入金 は 運 転 資 金 の 調 達 を 目 的 と し て お り ま す 。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれておりません。（「（注）2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額」をご参照ください。）

前連結会計年度(2018年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	6,779,858	6,779,858	—
(2) 受取手形及び売掛金	4,758,700	4,758,700	—
(3) 有価証券及び投資有価証券			
① 満期保有目的の債券	20,000	20,012	12
② その他有価証券	1,058,087	1,058,087	—
資産計	12,616,645	12,616,657	12
(1) 支払手形及び買掛金	633,777	633,777	—
(2) 未払金	1,243,161	1,243,161	—
(3) 長期借入金(※)	86,168	85,843	△325
負債計	1,963,106	1,962,781	△325

(※) 長期借入金には1年以内に返済予定のものを含む

当連結会計年度(2019年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	7,760,271	7,760,271	—
(2) 受取手形及び売掛金	5,217,935	5,217,935	—
(3) 有価証券及び投資有価証券			
① 満期保有目的の債券	—	—	—
② その他有価証券	823,104	823,104	—
資産計	13,801,310	13,801,310	—
(1) 支払手形及び買掛金	777,017	777,017	—
(2) 未払金	1,204,013	1,204,013	—
(3) 長期借入金(※)	60,369	60,038	△331
負債計	2,041,400	2,041,069	△331

(※) 長期借入金には1年以内に返済予定のものを含む

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法及び有価証券に関する事項

資産

(1) 現金及び預金、並びに(2) 受取手形及び売掛金

これらはすべて短期で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 有価証券及び投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっており、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。また、投資信託は公表されている基準価格によっております。

また、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「有価証券関係」注記をご参照ください。

負債

(1) 支払手形及び買掛金、並びに(2) 未払金

これらはすべて短期で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 長期借入金

長期借入金の時価については、元利金の合計額を新規に同様の借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

(注) 2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額

(単位：千円)

区分	2018年3月31日	2019年3月31日
非上場株式	104,116	94,026

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(3)有価証券及び投資有価証券 ②その他有価証券」には含めておりません。

3. 金銭債権及び満期がある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2018年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	6,779,858	—	—	—
受取手形及び売掛金	4,758,700	—	—	—
有価証券及び投資有価証券				
満期保有目的の債券(国債・ 地方債)	20,000	—	—	—
その他有価証券のうち満期があ るもの(社債)	—	100,000	—	—
その他有価証券のうち満期があ るもの(その他)	195,771	—	—	—
合計	11,754,330	100,000	—	—

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	7,760,271	—	—	—
受取手形及び売掛金	5,217,935	—	—	—
有価証券及び投資有価証券				
満期保有目的の債券(国債・ 地方債)	—	—	—	—
その他有価証券のうち満期があ るもの(社債)	—	100,000	—	—
その他有価証券のうち満期があ るもの(その他)	—	—	—	—
合計	12,978,206	100,000	—	—

4. 長期借入金の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度(2018年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	69,412	16,756	—	—	—	—
合計	69,412	16,756	—	—	—	—

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	30,361	9,996	9,996	10,016	—	—
合計	30,361	9,996	9,996	10,016	—	—

(有価証券関係)

1. 満期保有目的の債券

前連結会計年度(2018年3月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
時価が連結貸借対照表計上額 を超えるもの			
国債・地方債等	20,000	20,012	12
社債	—	—	—
その他	—	—	—
小計	20,000	20,012	12
時価が連結貸借対照表計上額 を超えないもの			
国債・地方債等	—	—	—
社債	—	—	—
その他	—	—	—
小計	—	—	—
合計	20,000	20,012	12

当連結会計年度(2019年3月31日)

該当事項はありません。

2. その他有価証券

前連結会計年度(2018年3月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
①株式	444,109	153,835	290,273
②債券			
社債	104,670	104,072	597
その他	—	—	—
③その他	248,820	244,988	3,832
小計	797,599	502,897	294,702
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
①株式	260,487	290,846	△30,358
②債券			
社債	—	—	—
その他	—	—	—
③その他	—	—	—
小計	260,487	290,846	△30,358
合計	1,058,087	793,743	264,343

(注) 1. 取得原価は減損処理後の金額で表示しております。

なお、減損処理にあたっては当決算末日の時価が取得価格に比べ50%以上下落した場合にはすべて減損処理を行っております。また、個別銘柄で当決算末日より前2年間の各日の時価が2年間を通じて取得原価に比べて30%以上50%未満下落した状態にある場合や、発行会社が債務超過の状態にある場合、または2期連続で損失を計上しており、翌期も損失が予想される場合には、回復する見込みがあるとは認められないため減損処理を行うこととしております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
①株式	431,265	113,301	317,964
②債券			
社債	103,580	102,962	617
その他	—	—	—
③その他	—	—	—
小計	534,845	216,263	318,582
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
①株式	288,258	332,417	△44,158
②債券			
社債	—	—	—
その他	—	—	—
③その他	—	—	—
小計	288,258	332,417	△44,158
合計	823,104	548,681	274,423

(注) 1. 取得原価は減損処理後の金額で表示しております。

なお、減損処理にあたっては当決算末日の時価が取得価格に比べ50%以上下落した場合にはすべて減損処理を行っております。また、個別銘柄で当決算末日より前2年間の各日の時価が2年間を通じて取得原価に比べて30%以上50%未満下落した状態にある場合や、発行会社が債務超過の状態にある場合、または2期連続で損失を計上しており、翌期も損失が予想される場合には、回復する見込みがあるとは認められないため減損処理を行うこととしております。

3. 連結会計年度中に売却した其他有価証券

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

区分	売却額 (千円)	売却益の合計額 (千円)	売却損の合計額 (千円)
株式	—	—	—
その他	3,178	—	—
合計	3,178	—	—

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

区分	売却額 (千円)	売却益の合計額 (千円)	売却損の合計額 (千円)
株式	—	—	—
その他	243,687	1,008	2,310
合計	243,687	1,008	2,310

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び国内連結子会社は退職一時金制度及び確定拠出年金制度を設けております。

なお、一部の連結子会社の退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付債務の期首残高	3,101,609	3,119,065
勤務費用	191,521	189,348
数理計算上の差異の発生額	△24,406	450,705
退職給付の支払額	△149,659	△147,872
退職給付債務の期末残高	3,119,065	3,611,247

(2) 退職給付債務の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債の調整表

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
非積立型制度の退職給付債務	3,119,065	3,611,247
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	3,119,065	3,611,247
退職給付に係る負債	3,119,065	3,611,247
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	3,119,065	3,611,247

(3) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
勤務費用	191,521	189,348
数理計算上の差異の費用処理額	32,850	31,870
確定給付制度に係る退職給付費用	224,372	221,218

(4) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
数理計算上の差異	57,256	△418,834
合計	57,256	△418,834

(5) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
未認識数理計算上の差異	△204,424	△623,259
合計	△204,424	△623,259

(6) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表わしております。）

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
割引率	0.0%	0.0%

3. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度140,673千円、当連結会計年度137,577千円です。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
税務上の繰越欠損金(注)	1,387,089千円	1,279,830千円
退職給付に係る負債	891,880千円	921,134千円
賞与引当金	109,037千円	264,607千円
減価償却の償却超過額	95,063千円	65,970千円
その他	177,915千円	197,533千円
繰延税金資産小計	2,660,986千円	2,729,075千円
税務上の繰越欠損金に係る 評価性引当額(注)	—	△1,243,132千円
将来減算一時差異等の合計に 係る評価性引当額	—	△1,299,598千円
評価性引当額小計	△2,542,736千円	△2,542,731千円
繰延税金資産合計	118,249千円	186,344千円
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△80,878千円	△83,935千円
繰延税金負債合計	△80,878千円	△83,935千円
繰延税金資産純額	37,371千円	102,409千円

(注) 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

当連結会計年度（2019年3月31日）

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の 繰越欠損金(a)	283,419	463,763	80,292	163,528	99,139	189,688	1,279,830千円
評価性引当額	△246,720	△463,763	△80,292	△163,528	△99,139	△189,688	△1,243,132千円
繰延税金資産	36,698	—	—	—	—	—	(b) 36,698千円

(a) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

(b) 税務上の繰越欠損金1,279,830千円（法定実効税率を乗じた額）について、繰延税金資産36,698千円を計上しております。当該繰延税金資産36,698千円は、当社における税務上の繰越欠損金の残高1,088,219千円（法定実効税率を乗じた額）の一部について認識したものであり、将来の課税所得の見込みにより、回収可能と判断しました。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.8%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入 されない項目	△127.4%	1.0%
役員賞与等永久に損金に算入 されない項目	—%	2.6%
受取配当金等永久に益金に算入 されない項目	15.4%	△0.1%
寄付金等永久に損金に算入 されない項目	—%	0.4%
住民税均等割等	△196.1%	1.8%
評価性引当額の増減	△14,777.9%	△9.7%
その他	△0.9%	0.8%
税効果適用後の法人税等の負担率	△15,056.1%	27.5%

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当社グループはソフトウェア開発を中心とするコンピュータ関連総合会社で、コンピュータ関連機器販売及びソフトウェア開発の両面を事業分野としております。

顧客の利用目的に応じたコンピュータ機器の選定とソフトウェアの開発を主とするITサービスを事業内容としており不可分の営業形態の単一のセグメントであるため、記載を省略しております。

【関連情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
日本電気㈱	3,551,891	ITサービス

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
日本電気㈱	4,327,893	ITサービス

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

当社グループは、ソフトウェア開発を中心とする単一のセグメントであり、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主(会社等に限る)等

該当事項はありません。

(イ) 連結財務諸表提出会社と同一の親会社を持つ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等

該当事項はありません。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

該当事項はありません。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	465.58円	465.80円
1株当たり当期純利益又は 1株当たり当期純損失(△)	△60.34円	31.13円

(注) 1. 前連結会計年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、1株当たり当期純損失であり、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。当連結会計年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益又は 親会社株主に帰属する当期純損失(△)(千円)	△1,112,496	573,295
普通株主に帰属しない金額(千円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益又は親会社株主に帰属する 当期純損失(△)(千円)	△1,112,496	573,295
普通株式の期中平均株式数(千株)	18,435	18,419

3. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
純資産の部の合計額(千円)	8,568,371	8,583,686
純資産の部の合計額から控除する金額(千円)	—	—
普通株式に係る期末の純資産額(千円)	8,568,371	8,583,686
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式 の数(千株)	18,403	18,427

(重要な後発事象)

該当事項はありません

⑤ 【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
1年以内に返済予定の長期借入金	69,412	30,361	0.6	—
1年以内に返済予定のリース債務	69,304	72,328	0.3	—
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	16,756	30,008	0.4	2020年4月1日～ 2023年3月31日
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	128,335	104,062	0.3	2020年4月5日～ 2023年11月26日
合計	283,808	236,760	—	—

(注) 1. 「平均利率」については、借入金等の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く)の連結決算日後5年内における1年ごとの返済予定額の総額

区分	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	9,996	9,996	10,016	—
リース債務	55,030	36,007	12,159	865

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第 1 四半期	第 2 四半期	第 3 四半期	当連結会計年度
売上高 (千円)	4, 129, 589	9, 332, 022	14, 398, 254	20, 457, 182
税金等調整前四半期 (当期)純利益又は 税金等調整前四半期 純損失(△) (千円)	△42, 974	294, 744	477, 522	791, 810
親会社株主に帰属する 四半期(当期)純利益又は 親会社株主に帰属する 四半期純損失(△) (千円)	△34, 273	218, 339	360, 509	573, 295
1株当たり四半期 (当期)純利益又は 1株当たり四半期 純損失(△) (円)	△1. 86	11. 86	19. 58	31. 13

(会計期間)	第 1 四半期	第 2 四半期	第 3 四半期	第 4 四半期
1株当たり 四半期純利益又は 1株当たり 四半期純損失(△) (円)	△1. 86	13. 71	7. 72	11. 55

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年 3 月31日)	当事業年度 (2019年 3 月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	5,943,225	6,800,769
受取手形	※1 113,182	※1 214,580
売掛金	※2 4,323,038	※2 4,559,263
有価証券	217,670	—
商品	99,923	422,975
仕掛品	274,892	334,763
前払費用	159,517	149,012
未収入金	※2 49,266	15,809
その他	※2 25,704	※2 29,869
貸倒引当金	△20	△20
流動資産合計	11,206,401	12,527,024
固定資産		
有形固定資産		
建物	90,437	86,160
工具、器具及び備品	21,802	24,609
リース資産	166,832	153,109
有形固定資産合計	279,072	263,880
無形固定資産		
ソフトウェア	456,829	438,849
その他	10,292	7,125
無形固定資産合計	467,121	445,974
投資その他の資産		
投資有価証券	961,533	914,131
関係会社株式	384,677	454,677
関係会社出資金	99,792	99,792
関係会社長期貸付金	70,000	50,000
長期前払費用	6,439	146,191
差入保証金	206,544	197,089
保険積立金	235,423	255,256
その他	61,849	60,858
貸倒引当金	△106,290	△86,290
投資その他の資産合計	1,919,970	2,091,707
固定資産合計	2,666,165	2,801,562
資産合計	13,872,567	15,328,586

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	※1 74,256	※1 226,607
買掛金	※2 472,287	※2 443,017
リース債務	66,271	69,295
未払金	※2 1,276,888	※2 1,212,652
未払法人税等	72,414	280,488
預り金	84,355	87,641
賞与引当金	287,255	772,481
役員賞与引当金	—	54,500
受注損失引当金	16,335	3,342
その他	210,225	538,013
流動負債合計	2,560,290	3,688,041
固定負債		
リース債務	125,049	103,809
退職給付引当金	2,690,824	2,753,273
長期末払金	21,970	21,970
長期預り金	20,615	20,615
繰延税金負債	57,102	10,687
固定負債合計	2,915,561	2,910,356
負債合計	5,475,852	6,598,397
純資産の部		
株主資本		
資本金	3,775,100	3,775,100
資本剰余金		
資本準備金	2,232,620	2,232,620
その他資本剰余金	3,567,031	2,505,514
資本剰余金合計	5,799,651	4,738,134
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	△916,509	464,814
利益剰余金合計	△916,509	464,814
自己株式	△444,957	△438,223
株主資本合計	8,213,284	8,539,825
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	183,430	190,363
評価・換算差額等合計	183,430	190,363
純資産合計	8,396,715	8,730,188
負債純資産合計	13,872,567	15,328,586

②【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	※1 16,490,108	※1 17,682,752
売上原価	※1 12,637,299	※1 13,479,661
売上総利益	3,852,809	4,203,090
販売費及び一般管理費	※1,2 3,844,407	※1,2 3,709,105
営業利益	8,402	493,984
営業外収益		
受取利息及び配当金	※1 43,219	※1 36,972
貸倒引当金戻入額	—	20,000
保険配当金	61,996	64,713
その他	※1 12,328	8,558
営業外収益合計	117,544	130,244
営業外費用		
支払利息	1,285	701
投資有価証券売却損	—	1,301
為替差損	—	3,368
その他	193	100
営業外費用合計	1,479	5,470
経常利益	124,467	618,757
特別損失		
訴訟関連損失	※3 32,200	—
減損損失	195,529	—
特別損失合計	227,729	—
税引前当期純利益又は税引前当期純損失 (△)	△103,262	618,757
法人税、住民税及び事業税	12,435	203,415
法人税等調整額	1,057,059	△49,471
法人税等合計	1,069,495	153,943
当期純利益又は当期純損失 (△)	△1,172,757	464,814

【売上原価明細書】

(システム開発売上原価)

		前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
区分	注記 番号	金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)
I 労務費	※1	5,128,557	48.3	5,822,764	51.5
II 外注費	※2	4,539,006	42.8	4,534,750	40.1
III 経費	※3	950,076	8.9	945,965	8.4
当期総製造費用		10,617,639	100.0	11,303,480	100.0
仕掛品期首たな卸高		377,313		274,892	
合計		10,994,952		11,578,372	
仕掛品期末たな卸高		274,892		334,763	
当期システム開発売上原価	※4	10,720,060		11,243,609	

(注) ※1. 主な内訳は、次のとおりであります。

項目	前事業年度 (千円)	当事業年度 (千円)
給料手当及び賞与	3,872,014	4,136,757
賞与引当金繰入額	227,633	547,776
退職給付費用	215,029	225,772
福利厚生費	813,879	912,458

※2. 主な内訳は、次のとおりであります。

項目	前事業年度 (千円)	当事業年度 (千円)
外注・外工費	4,130,031	4,120,306
保守料	408,974	414,444

※3. 主な内訳は、次のとおりであります。

項目	前事業年度 (千円)	当事業年度 (千円)
減価償却費	144,583	150,010
賃借料	308,157	322,498
水道光熱費	26,274	28,246
旅費及び交通費	171,335	180,151

※ 4. 当期システム開発売上原価と売上原価の調整表

区分	前事業年度（千円）	当事業年度（千円）
当期システム開発売上原価	10,720,060	11,243,609
期首商品たな卸高	177,540	99,923
当期商品仕入高	1,839,622	2,559,105
合計	2,017,162	2,659,028
期末商品たな卸高	99,923	422,975
商品売上原価	1,917,239	2,236,052
売上原価	12,637,299	13,479,661

（原価計算の方法）

システム開発売上原価については、プロジェクト別個別原価計算によっております。

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本					
	資本金	資本剰余金			利益剰余金	
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計
当期首残高	3,775,100	2,232,620	3,566,736	5,799,356	405,458	405,458
当期変動額						
欠損填補						
剰余金の配当					△149,210	△149,210
当期純損失(△)					△1,172,757	△1,172,757
自己株式の取得						
自己株式の処分			294	294		
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)						
当期変動額合計	—	—	294	294	△1,321,968	△1,321,968
当期末残高	3,775,100	2,232,620	3,567,031	5,799,651	△916,509	△916,509

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△352,436	9,627,479	93,095	93,095	9,720,574
当期変動額					
欠損填補		—			—
剰余金の配当		△149,210			△149,210
当期純損失(△)		△1,172,757			△1,172,757
自己株式の取得	△100,150	△100,150			△100,150
自己株式の処分	7,629	7,924			7,924
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)			90,334	90,334	90,334
当期変動額合計	△92,520	△1,414,194	90,334	90,334	△1,323,859
当期末残高	△444,957	8,213,284	183,430	183,430	8,396,715

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本					
	資本金	資本剰余金			利益剰余金	
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計
当期首残高	3,775,100	2,232,620	3,567,031	5,799,651	△916,509	△916,509
当期変動額						
欠損填補			△916,509	△916,509	916,509	916,509
剰余金の配当			△147,229	△147,229		
当期純利益					464,814	464,814
自己株式の取得						
自己株式の処分			2,221	2,221		
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）						
当期変動額合計	—	—	△1,061,516	△1,061,516	1,381,323	1,381,323
当期末残高	3,775,100	2,232,620	2,505,514	4,738,134	464,814	464,814

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△444,957	8,213,284	183,430	183,430	8,396,715
当期変動額					
欠損填補		—			—
剰余金の配当		△147,229			△147,229
当期純利益		464,814			464,814
自己株式の取得	△95	△95			△95
自己株式の処分	6,829	9,051			9,051
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）			6,932	6,932	6,932
当期変動額合計	6,733	326,540	6,932	6,932	333,473
当期末残高	△438,223	8,539,825	190,363	190,363	8,730,188

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

①満期保有目的の債券

償却原価法（定額法）

②子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

③その他有価証券

1) 時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価法

（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

2) 時価のないもの

移動平均法による原価法

(2) たな卸資産の評価基準及び評価方法

評価基準は原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）

①商品

1) コンピュータ機器……個別法

2) その他商品……総平均法

②仕掛品……個別法

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産除く）

定額法

(2) 無形固定資産（リース資産除く）

①ソフトウェア

（市場販売目的のソフトウェア）

見込販売数量に基づく償却額と見込有効期間（3年）に基づく均等配分額とを比較し、いずれか大きい額を償却する方法

（社内利用のソフトウェア）

見込利用可能期間（5年）に基づく定額法

②上記以外の無形固定資産

定額法

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価格をゼロとする定額法を採用しております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率法により、貸倒懸念債権等特定の債権については財務内容評価法によって回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

(4) 受注損失引当金

請負契約プロジェクトに係る将来の損失に備えるため、損失発生の可能性が高く、その損失額を合理的に見積ることができる請負契約プロジェクトについて、当該将来損失見込額を引当計上しております。受注損失の発生が見込まれる請負契約プロジェクトについて仕掛品が計上されている場合には、当該将来損失見込額のうち、当該仕掛品残高を限度として仕掛品残高から直接控除し、控除後残額を受注損失引当金に計上しております。

なお、当事業年度末の受注損失見込額32,125千円の内28,783千円を仕掛品残高から直接控除した結果、受注損失引当金の当事業年度末残高は3,342千円であります。

(5) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務の見込額に基づき計上しております。

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理しております。

4. 収益及び費用の計上基準

受注制作のソフトウェア開発に係る収益及び費用の計上基準

当事業年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められるソフトウェア取引については進行基準（進捗率の見積りは原価比例法）を、その他のソフトウェア取引については完成基準を適用しております。

5. その他の財務諸表作成のための重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当事業年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」が49百万円減少し、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」が25百万円増加しております。また、「固定負債」の「繰延税金負債」が23百万円減少しております。

なお、同一納税主体の繰延税金資産と繰延税金負債を相殺して表示しており、変更前と比べて総資産が23百万円減少しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第4項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(1)(評価性引当額の合計額を除く。)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前事業年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(貸借対照表関係)

※1 期末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理しております。

なお、期末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形が、期末残高に含まれております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
受取手形	14,318千円	35,685千円
支払手形	22,395千円	58,164千円

※2 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務(区分表示したものを除く)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
短期金銭債権	20,275千円	57,707千円
短期金銭債務	257,286千円	245,232千円

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	9,422千円	101,587千円
仕入高	139,287千円	182,073千円
外注費	1,249,601千円	1,293,701千円
その他	185,099千円	192,861千円
営業取引以外の取引による取引高	23,794千円	17,263千円

※2 販売費及び一般管理費のうち主要な費用及び金額並びにおおよその割合は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
給与手当及び賞与	1,640,470千円	1,428,967千円
役員賞与引当金繰入額	一千円	54,500千円
賞与引当金繰入額	51,213千円	209,282千円
福利厚生費	507,067千円	462,416千円
退職給付費用	181,902千円	127,214千円
減価償却費	96,472千円	87,413千円
おおよその割合		
販売費	20.4%	23.0%
一般管理費	79.6%	77.0%

※3 訴訟関連損失

前事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

当社が開発・製作した基幹ソフトウェアシステムに関して、損害賠償を求められた訴訟において和解が成立したことから発生した解決金(17,200千円)及びその他関連費用であります。

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式は、市場価格がなく時価を把握することが極めて困難と認められるため、子会社株式及び関連会社株式の時価を記載しておりません。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額は次のとおりです。

(単位：千円)		
区分	前事業年度 2018年3月31日	当事業年度 2019年3月31日
子会社株式	381,677	451,677
関連会社株式	3,000	3,000
計	384,677	454,677

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
税務上の繰越欠損金	1,338,706千円	1,088,219千円
退職給付引当金	823,392千円	842,501千円
関係会社株式評価損	248,104千円	248,104千円
関係会社出資金評価損	101,043千円	101,043千円
賞与引当金	87,900千円	236,379千円
減価償却の償却超過額	95,062千円	65,969千円
その他	157,811千円	182,670千円
繰延税金資産小計	2,852,019千円	2,764,887千円
税務上の繰越欠損金に係る 評価性引当額	—	△1,051,521千円
将来減算一時差異等の合計に 係る評価性引当額	—	△1,640,118千円
評価性引当額小計	△2,828,243千円	△2,691,639千円
繰延税金資産合計	23,776千円	73,247千円
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△80,878千円	△83,935千円
繰延税金負債合計	△80,878千円	△83,935千円
繰延税金負債純額	△57,102千円	△10,687千円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.8%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入 されない項目	△6.6%	1.2%
役員賞与等永久に損金に算入 されない項目	—%	2.6%
受取配当金等永久に益金に 算入されない項目	7.7%	△1.0%
寄付金等永久に損金に算入 されない項目	—%	0.6%
住民税均等割等	△12.0%	2.0%
評価性引当額の増減	△1,056.6%	△11.2%
その他	1.0%	0.0%
税効果会計適用後の法人税等の 負担率	△1,035.7%	24.8%

(重要な後発事象)

該当事項はありません

④ 【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：千円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	90,437	7,387	—	11,663	86,160	121,798
	工具、器具及び備品	21,802	9,554	0	6,747	24,609	69,156
	リース資産	166,832	56,370	—	70,092	153,109	142,292
	計	279,072	73,311	0	88,504	263,880	333,248
無形固定資産	ソフトウェア	456,829	130,440	316	148,104	438,849	—
	その他	10,292	—	—	3,166	7,125	—
	計	467,121	130,440	316	151,271	445,974	—

- (注) 1. リース資産の増加の主なものは、社内業務用パソコン等の取得によるものであります。
2. ソフトウェアの増加の主なものは、社内利用ソフトウェアの取得によるものであります。
3. 当期首残高又は当期末残高については、帳簿価額により記載しております。

【引当金明細表】

(単位：千円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	106,310	23	20,023	86,310
賞与引当金	287,255	772,481	287,255	772,481
役員賞与引当金	—	54,500	—	54,500
受注損失引当金	16,335	3,342	16,335	3,342

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 大阪府中央区北浜四丁目5番33号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	—
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	当社の公告方法は、電子公告としております。 ただし事故その他やむを得ない事由により電子公告をすることができないときは、日本経済新聞に掲載しております。 当社の公告掲載URLは次のとおりであります。 https://ncsa.jp/
株主に対する特典	なし

(注) 当社の株主は、定款の定めにより、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を有しておりません。

会社法第189条第2項各号に掲げる権利

会社法第166条第1項の規定による請求をする権利

株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利

株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求をする権利

第 7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度 第52期（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）2018年6月22日近畿財務局長に提出。

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2018年6月22日近畿財務局長に提出。

(3) 四半期報告書及び確認書

第53期第1四半期（自 2018年4月1日 至 2018年6月30日）2018年8月9日近畿財務局長に提出。

第53期第2四半期（自 2018年7月1日 至 2018年9月30日）2018年11月9日近畿財務局長に提出。

第53期第3四半期（自 2018年10月1日 至 2018年12月31日）2019年2月8日近畿財務局長に提出。

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）の規定に基づく臨時報告書

2018年6月27日近畿財務局長に提出。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月14日

NCS&A株式会社

取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 吉村 祥二郎 ㊞

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 樋野 智也 ㊞

＜財務諸表監査＞

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているNCS&A株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、NCS&A株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、NCS&A株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、NCS&A株式会社が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年6月14日

N C S & A株式会社

取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 吉村 祥二郎 ㊞

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 樋野 智也 ㊞

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているN C S & A株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第53期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、N C S & A株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	近畿財務局長
【提出日】	2019年6月21日
【会社名】	N C S & A株式会社
【英訳名】	NCS&A CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 辻 隆 博
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	大阪市中央区城見1丁目3番7号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号) N C S & A株式会社東京本社 (東京都江東区豊洲5丁目6番36号) N C S & A株式会社名古屋支社 (名古屋市中村区名駅南2丁目14番19号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長 辻 隆博は、当社及び連結子会社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することでその目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当連結会計年度の末日である2019年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制評価の基準に準拠いたしました。

本評価におきましては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）について評価を行い、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価におきましては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況の評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行っております。

財務報告に係る内部統制の評価範囲は、当社及び連結子会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定いたしました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社及び連結子会社2社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定いたしました。なお、連結子会社4社及び持分法非適用関連会社1社につきましては、金額的及び質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めておりません。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲につきましては、前連結会計年度の連結売上高を指標に、その概ね2／3に達している事業拠点を「重要な事業拠点」といたしました。選定した重要な事業拠点におきましては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として、売掛金、仕掛品、固定資産、売上高及び売上原価に至る業務プロセスを評価の対象といたしました。さらに、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しております。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当連結会計年度末時点におきまして、当社グループの財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4 【付記事項】

該当事項はありません。

5 【特記事項】

該当事項はありません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	近畿財務局長
【提出日】	2019年6月21日
【会社名】	N C S & A株式会社
【英訳名】	NCS&A CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 辻 隆 博
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	大阪府大阪市中央区城見1丁目3番7号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号) N C S & A株式会社東京本社 (東京都江東区豊洲5丁目6番36号) N C S & A株式会社名古屋支社 (名古屋市中村区名駅南2丁目14番19号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長 辻 隆博は、当社の第53期(自2018年4月1日 至2019年3月31日)の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。